
ハーレム目指して何が悪い

白告 介

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ハーレム目指して何が悪い

【Nコード】

N1558Y

【作者名】

白告 介

【あらすじ】

柴田速人はその日もオンラインゲームをして寝た。次の日起きると異世界だった。

その世界で速人はどう生きていくのか？

チート、主人公最強物です。ハーレム目指します。

プロローグ(前書き)

初投稿です。よろしくお願ひします。

プロローグ

目の前に青白いエフェクトが飛び散った、ドラゴンが咆哮する。俺達は4人でパーティーを組んで、このドラゴンに立ち向かっている。まあ今の俺達には全然弱い敵だ、そんなに苦労しないだろうと思う。本当にいつ見てもでかいな、と余計な事を考えながら奴から距離をとる。

「グアアギャーツ！」

この叫び声だけは何度聞いても慣れない、次の瞬間迫り来る炎、隣から巨大な盾を持った人が飛び出してくる。

「助かった！ありがとうマサ」

俺はマサに礼を言って走り出す、ドラゴンの首元に近づくと自慢の双剣で切り付ける。

「グッ！」

直後に飛んできた尻尾に薙ぎ払われる。壁にすごい勢いで飛ばされる。なんて奴だ。俺は悪態をつきながら立ち上がる。

「ハヤト！大丈夫！？」

ハルカが回復呪文を掛けてくれる、体から痛みが引いていく。

フラッシュエクスポージョン
「閃光の爆発」

後ろの方で呪文が唱えられてドラゴンに光が集まり、爆発する、サトルだ。

俺も双剣を持ち直して走り出す、ドラゴンの尻尾を避けつつ近づくと、スキル『連続斬』を発動させる、右手に持った剣で頭を斬り付ける、次の瞬間には左の剣がくびを斬った、ドラゴンは苦しむがまだ倒れない、くそっ、しぶといやつめ。

「サトル！頼む！！マサ援護！！！」

俺は下がりながら叫ぶ、サトルが後ろで呪文を唱えている、ドラゴンがサトルに炎を吐く、がマサが出てきて盾で守る。

俺もタイミングを見計らって走り出す。

サトルが呪文を完成させる。

ヘルフレイム
「火炎地獄！」

すぐにドラゴンが火に包まれる俺はそれを無視して火の中を走る、スキル『斬撃の嵐』を発動して目にも止まらぬ速さで切り付ける。

「ハアアア ヤッ」

俺が切り終わるとドラゴンはゆっくりと倒れた。

画面にクエストクリアーの文字が広がった。

俺は、安堵して伸びをしながらパソコンの画面から目を離れた。ふと壁に掛けている時計を見てみる。

「・・・2時15分か・・・フ、フワア・・・ねむっ」

欠伸をして画面を見ると他のパーティーのメンバーたちが別れの挨拶をしていた、俺も挨拶をしてパソコンを切る。

俺がしていたオンラインゲームは『FIGHT QUEST』というゲームでダンジョンなどをモンスターを倒しながら探索するのだ。なかなか凝ったゲーム内容としっかりしたサポートで人気がある。

俺は、このゲームにハマって学校から帰ると寝るまでやり続けている、別に俺に友達がいなくて他にやる事がないとかではない・・・
・・・本当だぜ・・・。

そんなしょうもないことを考えながら明日の学校の準備をしてベツトに入った。

第1話 異世界へ

「……んっ……んん」

なにやら寝心地が悪いと思いつつながら目を覚ますと外だった……

えっと、俺ちゃんとベットで寝たよな？

………混乱してきた……まず、今の状況を把握しよう。

まず俺の名前は柴田速人、年は17で高校二年だ。

175センチのまあ特に特徴のない高校生だ。髪も染めてない黒だ。

昨日は、オンラインゲームでいつものメンバーとクエストをしてからベットで寝たはずだ。

遅かったし疲れてたんだ。

何が起きたんだホントにと思って周りを見てみるとどこまでも草しかない草原だった。

こんな草原が日本にあるのか？もしかして海外か！！

よく見ると見たこともない草だ。

ふと自分を見ると布でできた服を着ていた。寝る時はジャージで寝たはずだが……んっこの服見たことあると思っていいたら、昨日や

っていたオンラインゲームの初期装備にそっくりだ。

まさかゲームの世界に来たとか？

小説とかではよくある展開だが俺は遠慮しなかったな。

試しにステータスと念じてみた。

すると目の前に文字が浮かんできた。

シバタ ハヤト

Lv:1

人間

自由民

17歳

平民

体力 100

筋力 999

知力 001

耐力 100

俊敏 999

器用 800

スキル

片手剣 100

双剣 100

ナイフ 10

隠密 100

ステータス確認

魔法

装備

布の服

皮の靴

鉄の剣

………うんっ、出ちゃったよ！

俺が使っていたキャラとステータスはほぼ同じだし、レベルと装備は初期に戻ってるけど。

俺は攻撃力と素早さを上げまくってたから、ステータスが偏っている。

魔法は全く使えないし、防御力や体力も低い。

まあその分剣だけで大抵のモンスターは倒せるようになった。

どうせゲームの世界に来るのならば魔法使えるようにしとけばよかった。

憧れるよね魔法。

スキルは双剣と片手剣と隠密がMAXでナイフが少し……んっ、見覚えのないステータスがある。『ステータス確認』なんだこれ？

名前から考えると今見てるやつかな。

さて、どうしよう……本当にゲームの中に来たのか？

他に人はいるのか？

モンスターもいるのか？

俺は強いのか？

いろいろ考えたが答えが出ない、とりあえず情報が必要だ。

人がいる所を探そう、・・・・・・・・人が居ればな・・・・。

俺はそう思って歩き出した。

「誰もいねー！ー！」

あれから3時間ぐらい歩いてやっと道に出た。

どっちに行ったらいいか分らるので適当に歩いていたが誰にも会わ
ん。

「道があるから人はいるはずなんだけどな」

今のところモンスターにも会ってないし何か悲しい。

弱いモンスターで腕試しがしたかったんだけどな。

俺はこのまま飢え死にするんじゃないだろうか？

町はないのか、道があるからあるはずなんだが。

不安になってきた。誰か出てこないかな。

そんなことを考えていると自然と少し急ぎ足になっていた。

「何だ!!」

突然どこかで大声がした。

第1話 異世界へ（後書き）

第1話でした。

これからはできれば2、3日に1回投稿したいです。

よろしく願います。

第2話 盗賊（前書き）

早く出来たので投稿します。

第2話 盗賊

「何だ！」

誰かが叫んだ。

んっ、俺か？

そう思つて周りを見てみるが、誰も見当たらない。

声が出た所に行くとな人に会えるかなと思ひ走り出した。

少し行くと馬車が止まっていた。

馬車を取り囲んでいる盗賊らしき男たち。

10人はいるだろうか。

馬車の近くには鎧を着た人が倒れていて、そのそばに高そうな服を着たおっさんが震えていた。

「なんだ、オッサンかよ」

出来れば貴族の女の子を救つて、その女の子に好かれるなんて展開を期待してたのに。

残念だ。

とりあえず話し掛けてみよう、何かこの世界の情報が分るかもしれ

ないし。

もしかしたら、あのおっさんが悪いかもしれない。

「すみませ〜ん」

呼びかけてみると盗賊たちは振り返った。

一人が話しかけてきた。

「あつ！なんだてめえは」

うわっ、いきなり不機嫌そうだ。

「通りすがりの旅人です」

ちょっとおどけて行ってみた。

「調子乗ってんじゃねえぞ」

余計怒らせてしまった。

面倒臭いやつだな、とりあえず何しているのか聞いてみようか。

「すみません、何してるんですか？」

ニコツと笑顔も付けてやった。

「何笑ってんだ気持ち悪いな。何してるって、そりゃ商人襲って商品を頂こうとしてんだよ」

気持ち悪いって……、傷付くな。

やっぱりか、日本よりは治安が悪いみたいだ。

それはそうだろうな、みんな剣持っているし。

とりあえず何か聞いてみよう。

「あゝ、聞きたいことがあるんですが」

すると今まで話していた人の後ろからリーダーみたいな人が話し掛けてきた。

「おい、てめえ分かってんのか？俺たちは今強盗してんだよ」

「もういいじゃないすか、どうせ顔見られたんだから殺すんでしょっ？」

「ああ、やっちまえ」

まじかよ、結局何の情報も引きだせなかった。

あのステータスだから負けることはないと思うけど。

この世界でも斬られたら死ぬんだろうな。

ゲームみたいに復活はしないだろう。

近くにいた人が切り掛かってきた。

俺は焦って横に避けた。

うわっ、すごく速く動けるし相手が遅く感じる。これが俊敏999か。

「何っ！」

男が驚いてる。

剣を抜くと思つたより重くなかった。

筋力も上がっているみたいだ。

隙だらけの男に切り掛かる。

意外と軽く切れた。

鮮血が飛び散る。

男の首が飛んだ。

「うわっ！」

思わず声が出た。

吐きそうになる。

最悪だ人を殺してしまった。

自分でやっというてなんだがえぐい。

「てめえよくも！」

他の盗賊たちが来る。

迫る剣を避けて切り付ける。

また鮮血が飛び散る。

次に迫ってきた剣も避ける。

切りつける。

体が風のように軽い。

興奮してアドレナリンが回ってきた。

次々と避けては切り付ける。

全員殺すのにそんなに時間はかからなかった。

俺は返り血で真っ赤に染まっていた。

俺は、人を殺してしまった。

戦闘の興奮が覚めると自分のしてしまったことが恐くなった。

吐き気を必死に抑える。

相手は犯罪者だ。

殺さなければ俺が殺されていたんだ、ここは日本じゃないんだ。

そう自分を無理矢理納得させる。

そうしないと自分を見失いそうだった。

一人で呆然としていると不意に後ろから声が聞こえた。

第3話 奴隸商人（前書き）

調子がいいのでまた投稿。

第3話 奴隷商人

後ろからの声に振り返ると高級そうな服を着たオッサンがいた。

「あの、助けて頂いてありがとうございます」

「いや、別にいいよ」

いいから放っておいてくれ、俺は今、自己嫌悪中なんだよ。

「護衛の者もやられて危ういところでした。商品の奴隷も無事でしたし、どうお礼をしたらいいのか」

あの鎧の人は護衛だったのか。

商品も無事でよかった………って奴隷？

あー、そういえばゲームでも一人でプレイする人のために奴隷を買って一緒に戦うってのがあったな。

何のためのMMOだっと思って、俺はパーティー組んでたから忘れてた。

「ど、奴隷？」

思わず聞き返す。

「はい奴隷でございます、あなた様は見た所冒険者みたいですが、パーティーを組んでいるわけでもないみたいですし、奴隷を買われ

ないんですか？」

と言われても金がない。

こう堂々と奴隷と言うんだから、奴隷が普通に認められているんだろつ。

しかしこう普通に奴隷と聞くとなんだが嫌だな。

やはり現代人としては嫌悪感がするな。

「金があまり無いからな」

一応少ないことにしておく。

「それならその盗賊たちは賞金が掛けられていると思いますから、その賞金で買えると思いますよ」

まじで、賞金があるのか。

「よろしければ町までお送りしますが、町で奴隷商をやっておりますオスカーでございます。店にもぜひ来てください。命を助けて頂いたので、安く致しますよ」

そう言って笑うオスカーさん。

「そうか、なら頼もう。そういえば賞金を受けとるにはどうしたらいいんだ？」

「えっと、武器を持って行けばいいんですが、知らなかったのです

か

聞くと驚いた顔をしたが答えてくれた。

まずい怪しまれたか。

異世界から来たというのはあまり知られたくないから、ごまかそう。

「いや、田舎から出てきたばかりなもんで」

まずったかな？

まっ、大丈夫だろう・・・そう思っておこう。

馬車で町まで送って貰うことにした。

「なあ、これから行く町はなんて町なんだ？」

「冒険者の町マスラです。近くにダンジョンがあつて、冒険者が多いんです。アースファルト王国では二番目に大きい町です。」

んー、ゲーム内にはなかった国や町だな、そこまでは一緒じゃないのかな。

「そういえば、さっきの盗賊たちに魔法使いがいなかったけど、やっぱり珍しいのか」

「ええ、魔法の才能がある人は少ないそうです。ハヤト様は魔法を

「？」

「いや、俺は剣だけだ」

やっぱり珍しいのか。

そういえば日本語が通じている、異世界だからかな？

どうしてだろう？

まあ、便利だからいいや。

その後、オスカーさんと話して一年は365日で地球と同じだと分かった。

ほぼ地球と変わらんな。

黒髪黒目はいないことはないがそれなりに珍しいらしい。

それからオスカーさんと雑談しながら町を目指した。

第4話 冒険者ギルド（前書き）

今まで1話ごとが短すぎたので、少し長くしました。
更新速度は落ちるかもですが悪しからず。

第4話 冒険者ギルド

「うわ〜」

マスラは予想してたより大きかった。

周りは柵で囲まれて正面に立派な門がある。

マスラに入ると結構人がいた。

出店みたいなのがたくさんあって、店の人たちが口々に客引きしている。

冒険者らしき剣や斧を持った人、ローブをきたいかにも魔法使いだという人がいる。

驚いたことに耳が尖っているエルフと思われる人や、背が小さくやたら筋肉質なドワーフっぽい人までいた。

そんな異種族に感動していると、オスカーさんに話し掛けられた。

「どうしました？」

「いや、俺の故郷には異種族がいなかったから」

「そうなんですか？ここら辺では普通ですよ」

と笑っていた。

決して嘘ではない・・・俺の故郷、地球ではいなかったからな。

十字路に差し掛かった時オスカーさんがこっちを向いた。

「その角の建物が冒険者ギルドです。盗賊たちの賞金はそこで貰えます。ギルドの登録もしたほうがいいでしょう。向かいが宿屋、私のやっている奴隷商はここを右に曲がった先です」

「親切にありがとう」

「いえいえ、命を助けられたのですから当然です。奴隷が必要になったら来て下さい。安くしますので」

「じゃあ」

そう言って盗賊たちの剣を入れた麻の袋を持って、オスカーさんと別れた。

麻の袋はオスカーさんに貰った。

まず、冒険者ギルドに行つてギルドに登録して、賞金でも貰いますか。

冒険者ギルドは、レンガの立派な建物だった。

中に入ると目の前にカウンターが3つあった。

右手には依頼書だと思われる紙が貼つてある掲示板がある。

カウンターは左が空いていたからそこに行く。

「すみません、ギルドに登録したいんですけど」

カウンターの中にはメガネの若い女の人がいた。

いかにも、出来る女という感じだ。

結構、美人だ。

「はい、登録ですね。この紙に名前を書いて下さい。名前以外は別に書かなくてもいいですよ。あと登録に10セール頂きますがよろしいですか？」

「ああ、大丈夫だ」

何故お金があるかというと、オスカーさんに貰ったからだ。

ギルドに登録してない言うとお礼にとくれた。

オスカーさんの話しからすると、1セールは大体100円ぐらいだ
と思う。

紙を見ると日本語だ。

俺がそう見えるだけかもしれないが便利でよかった。

まずは名前、柴田 速人。

年齢、17。

種族、人間。

技能……。

「すみません技能って何書いたらいいんですか？」

「使える武器や魔法などを書いて頂いたら依頼を紹介しやすくなります。別に書かなくても問題ありませんよ」

そうか、どうしよう。

とりあえず、剣、双剣と書いておく。

出身地は書けないな。

こんなもんでいいか。

「書けました」

「はい、柴田速人様ですね、私は受付のミリアです。少々お待ち下さい」

そういつて奥に入って行った。

周りを見てみると猫耳が生えている女の人がいた。

獣人もいるのか！？

やっぱり猫耳は萌えるなあと思っていたらミリアさんが帰ってきた。

「こちらがギルドカードになります、無くさないようにして下さい。再発行には100セル掛かります」

「分かりました」

「では、ギルドについて説明しますね」

「お願いします」

「このギルドではランクがEからAさらにその上にSまであります。ランクは依頼にも書かれていまして、自分の二つ上のランクまでの依頼しか受けられません。ランクを上げるには同ランクの依頼を10回か、1つ上の依頼を5回か、2つ上の依頼を2回成功させれば上がります。ただしAからSへはギルドで判断します。ここまでよろしいですか？」

「ランクによって変わるのを受けられる依頼だけですか？」

「いいえ、ランクが上がるごとに宿や他の店でも値引きして貰えます。ハヤト様はEからですから頑張ってください」

まじか早くランク上げたくなってきた。

「おお、それは」

「次に依頼ですが討伐、採集、護衛、他にも様々な種類があります。依頼は向こうにある掲示板で確認して紙をカウンターに持ってきて頂ければ、依頼主に合わせる手はずになっています。依頼の報酬は一割ギルドが頂きます。失敗した時は罰金を頂きますので実力にあった依頼をつけて下さい」

ミリアさんはここで言葉を切った。

「依頼は一度に一つしか受けられないんですか？」

「はい、一つしか受けられません。しかし討伐や採集などは、証明の部位がありましたら、後から依頼を受けて頂いてもいいですよ。また、依頼の掲示板の横には賞金首が張り出されています。この者たちを捕まえるか討ち取った時はこちらにきて頂いたら賞金を渡します。殺人などの犯罪を犯した際には、賞金首になつてしまいますので注意して下さいね。ああ、もちろん賞金首や盗賊などは別です。」

焦った、いきなり賞金首にされるかと思った。

「また、パーティーを組んで頂くこともできます。その場合は一番下のランクの人の3つ上の依頼までが受けれます。パーティーは5人までです。奴隷もパーティに含まれます、奴隷にランクがありませんので、主人のランクと同じになります。ハヤト様はパーティーを組んでいない様なので奴隷を買われるのですか？」

「んーやっぱり一人じゃ厳しいのかな？」

「そうですね、ランクが上がると厳しいでしょうね。パーティーを組むのも信用している人がいないと難しいですしね」

「そうですね、考えておきます」

やっぱり厳しいのか。

俺なら一人でもいけないことはないだろうが、目立ち過ぎるだろうな。

目立つのは避けたい。

「最後にギルドメンバーの揉め事にはギルドはあまり関わりませんのでお願いします」

なんて無責任な。

まあ、そんなものなのかな、荒くれ者も多いだろうし、やっかいごとが多いんだろう。

「あつ、そういえばここに来る途中で盗賊に襲われている人を助けて、その時に殺した盗賊の武器があるんですが、賞金ってもらえますか？」

「調べてみますので出して頂けますか？」

俺は袋から十本の武器を出した。

武器を調べるミアリアさん。

「じつ、これはっ！」

びっくりした顔をしている。

何かまずい事でもあったのか？

「これは、今この町で暴れていた盗賊団です！ギルドでも行方を探

していたんです、助かりました」

身を乗り出して言ってくる。

か、顔が近い。

「そ、そうなんですか？」

「そうですね、ありがとうございます。賞金は三万五千セーリングになります。」

セーリングとはこの世界の通貨だ。

三万五千セーリングって三百五十万円！？

まじか、一気にこんな大金が入るとは。

「三万五千セーリングです」

言いながら金貨三枚と銀貨五枚渡してきた。

金貨は銀貨10枚分さらに下には半銀貨、銅貨、半銅貨があるそれぞれ十枚で上に上がる。

「ありがとうございます、ミリアさん」

そう言って受付から離れて依頼書でも見てみようと思ひ、掲示板に近づくと。

「おい、お前」

いきなり目の前のチャラチャラした男に話し掛けられた。

「え〜と、何ですか」

「ギルドに入ったばかりで、盗賊団を倒したからって調子に乗って、ミアさんと親しそうに話してんじゃねえぞ」

うわっ面倒臭！どこにでもこついう弱いくせに偉そうにするやつっているよな。

「てめえ！舐めてんのか？」

「えっ、声に出てた？」

まズった。

俺たちの声が周りの注目を集める。

男は周りを見て舌打ちをする。

「くそっ！覚えてろよ。せめて夜道には注意することだな」

捨てゼリフを吐いて出て行った。

さすがにギルドの中では暴れなかったようだ。

よかった、揉め事は勘弁だからな。

目立ってしまったよ。

俺も人目から逃げるようにギルドを出た。

第5話 宿屋

ギルドを出るとまだ日が高かったから、町をぶらつくことにした。

まず、武器を買ったために武器屋に行く。

武器屋は、いかにも職人の工房みたいな所に、武器が並べてあった。中に入るとドワーフのオッサンがいた。

「いらっしやい」

「すみません、双剣ってありますか？」

「おう、あるぜ」

そういつて指差した先には、綺麗な双剣が置いてあった。

「それは、ミスリルの剣だ」

ミスリルか！

まあ、最初の武器にしては上等だろう。

「オッサン、これいくら？」

「二千セールが二本で四千セールだ」

「よし、買った」

銀貨を四枚はらう。

オッサンは、剣を鞘に入れて渡してくれた。

ついでに、今まで持っていた鉄の剣を渡す。

店から出て、防具を買おうと思っていたけど、重いのが嫌なので止めておく。

この装備のままにいるのも嫌だったから、服屋に入った。

服屋では、黒のズボンとインナー、それから黒の外套と全身黒の格好にした。

剣は左右に一本ずつ引っ提げた。

目立たない様に黒にしたけど、黒づくめに左右の剣は目立つ気がするのは気のせいだ。

服は全部で五百セルだった。

以外と高い……。

その後もぶらぶらしていると、細い道に入った。

戻るのは嫌なので進んでいると、前に何やら揉めている5、6人の人たち。

「うわ、最悪」

嫌だったが気になるので近づく。

獣人の女の子が5人の若者に囲まれていた。

「何してるんだ？」

とりあえず聞く。

「うるさいな！俺は今いらついているんだ！ギルドで気に喰わないガキと言い合いをして、むしゃくしゃしている所にこの獣人のガキがぶつかってきたのに謝らねえんだ。獣人の癖に生意気な奴だ」

よくしゃべるな。

やっぱり獣人って差別とかあるのか？

このチャラチャラした男いらつくな……この男見たことあるな。

あつ、ギルドで絡んできたやつだ。

つて気に喰わないガキって俺のことか。

「ねえ、俺のこと覚えてない？」

「あつ！」

俺の顔をジロツと見てくる。

「てめえ、ギルドでは恥かかせてくれたな」

「いや、自滅でしょ」

「黙れ！もういいお前らやっちまえ」

4人が殴り掛かってくる。

剣はまずいと思って、素手で対応する。

ステータスのおかげで力は増している。

「ぐはっ」

「ゴバッ」

「へぶらっ」

「がっ」

すぐに4人には地面とキスしてもらおう。

「こんな事二度とすんじゃねえぞ」

言いながらチャラチャラした奴も殴る。

獣人の女の子は驚いた顔をしていた。

俺より少し年下みたいで、猫耳としっぽがついていた。

「あ、ありがとうございます。あたしはスン。冒険者になったばかりなの」

「おう、いいって。俺はハヤト。俺も冒険者になったばかりだ」

猫耳に感動していたから焦る。

「本当にありがとう、この恩は必ず返すから」

そう言って走り去ろうとした。

「ちょっと待って」

俺は呼びとめる。

「何？」

こっちを警戒しているが気にせず用件を言う。

「恩はここで返してくれないか？」

「こゝ、ここで！何をさすの？」

涙目で見ってくる。

かわいい、思わず抱きしめたくなった。

「何を勘違いしているか分からないけど、俺は道に迷っているんだ。ギルドの所まで案内してくれないか」

「そ、そんなことなら早く言っつてよね」

スンは顔を真っ赤にして言った。

訳が分からん。

スンに案内して貰って無事ギルドまで戻って来れた。

「ありがとう、スン」

「あたしの方こそありがとう」

恥ずかしそうに言っつと走り去っつて行っつた。

もう日が暮れかけている。

今日はもう宿屋に泊まるっつと思っつて、ギルドの向かいにある宿屋に入っつた。

「いらっつしゃいませ」

宿に入ると、おれと同一年ぐらいの女の子がカウンターのの中にいた。短めの茶髪で目がクリクリしていてかわいい。

「えっつと、部屋は空いてますか？」

ちよっつとドキドキしながら話し掛ける。

やっぱり、かわいい娘はいいな。

「はい、空いてますよ。お一人様ですか？」

「はい、そうです。一泊いくらですか？」

「30セールです。ご飯は20セールで付けることができます」

「じゃあ、ご飯付きで。とりあえず、10日分」

銀貨を一枚渡す。

「はい、ありがとうございます。お釣りの500セールになります」
半銀貨5枚を受け取る。

「私は、ニーナです。両親がこの宿をやっているので、手伝っているんです」

やっぱり娘か。

これで店の主人とか言われたら、驚きの若さだ。

「えーっと、俺はハヤトです。一応冒険者をしています」

「冒険者ですか、怪我の無い様にして下さいね」

ニコツと笑い掛けてくる。

か、かわいい。

「どうかしましたか？」

「い、いえ何でもありません」

見とれていると話し掛けられてあせる。

「そうですか、では、部屋に案内しますね」

「お願いします」

ニーナさんは、カウンターから出てくると、階段を上って行く。

俺は急いで追いかけた。

「わあ、いい部屋ですね」

部屋は、そんなに広くないが、綺麗にまとまっっていていい感じだ。

「夜ご飯は日が暮れてから、朝は日が昇ってから食堂に来て頂ければ食べられます。お風呂は、1階にあるのでご自由にどうぞ」

おお、風呂があるのか。

勝手な想像で無いかと思っていた。

「分かりました」

「では、しゅっくり」

ニーナさんは出て行った。

「まだ、日が出ているし、先に風呂入ってこよう」

「あゝ、気持ちよかった」

風呂から出て来ると、もう日が暮れていた。

晩飯を食いに食堂に向う。

途中で見知らぬおばさんに話し掛けられた。

「あなた、新しいお客さんだっけね。ニーナから聞いたよ。あたしはニーナの母親のシミルだよ」

ニーナのお母さんか。

イマイチ似てない。

「よろしくお願ひします。食堂つて向こうですよね?」

「ああ、そつだよ。食事を作っているのは夫のバールだよ。味は保証するよ」

「それは楽しみだな」

「ぜひニーナとは仲良くしてやってくれないかい? ずっとこの宿で

働いてるから、同年代の友達がいらないんだよ」

「えっ！もちろんいいですよ」

「じゃあよろしくね」

そう言うなり去って行った。

嵐の様な人だった。

食堂に着くと他にも何人が客がいた。

一人の客は他にいなかった。

みんなパーティーを組んでいるか、奴隷を連れたりしているのかな。

一人なのでカウンターに座る。

ウェイトレスがよってきて、注文を聞いてくる。

料理名なんて分からなかったから、オススメを聞いてみてそのままのんだ。

運ばれてきた料理は、パンっぽいのと、何かの肉を炒めたものにスープだった。

シミルさんが言ってただけあって味は美味しかった。

「じちそうさま」

美味しかった。

どんな料理が来るかビクビクしていたから満足だ。

食堂を後にして部屋に戻った。

「今日は疲れたな」

一人でつぶやくとベッドに寝転んだ。

今日はいろいろあったな。

元の世界で心配させているだろうか？……まあ友達はいなかったからあまり悲しまれていないだろう。

なんだか目から水が……。

親には悪いことしたな。

まあ、この世界でも生きていけそうだし心配すんな。

何たって俺は、チートだし。

無双とか出来るだろう。

もう、開き直って女の子たちを侍らして、ハーレムでも作りたいな。

地球では女の子と縁がなかったからな。

これは元の世界に未練が無いかも。

よし、目指せハーレム!!

そんな事を考えながら眠った。

第6話 エルフ

朝起きると知らない天井だった。

「そうか、異世界に来たんだ」

昨日考えた結果、一人は目立つし何かがあるか分からないと思った俺は、奴隷を買おうかと思っている。

出来れば魔法が使えるとうれしい。

それに俺はこの世界の常識に疎いから、そこら辺も聞きたいし。

「よし、今日は奴隷商に行こう！」

何だか独り言が多くなってきた気がする。

早く話し相手が欲しい。

食堂でご飯を食べて、宿を出る。

町は朝から活気があった。

奴隷商に着く、建物は意外と綺麗で大きいかった。

中に入って受付に話し掛ける。

「すみません、ハヤトと言う者ですけど、オスカーさんは居ますか」

「少々、お待ち下さい」

奥に入って行くと、少しして戻ってきた。

「こちらにどうぞ」

ついていくと、応接間に案内された。

少しすると、相変わらず高そうな服を着たオスカーさんが現れた。

奴隷商つてのは儲けるみたいだ。

「ハヤト様、今日は来て頂いてありがとうございます」

「ああ、オスカーさんのおかげでギルドに登録出来たし、賞金を手に入れる事もできた」

「今日は、どのような用件で？」

「奴隷を探しに来た」

「どのような奴隷ですか？」

「その前に聞いておきたいのだが、奴隷は、どんなやつがるのか？」

「奴隷は犯罪者が身売りなどですね」

「犯罪者は危険が無いのか？」

「大丈夫ですよ、主人の命令を聞く魔道具を付けていますので、犯罪行為をさせる以外の命令には逆らえません」

魔道具か、魔法があるから当然か、自分が買った奴隷に殺されたくはないからな。

「出来れば魔法を使える、女の子はいるか」

やっぱりかわいい女の子の主人になりたいですよ。

しかも命令を聞くって言っている。

男の夢だな。

「魔法を使える女の子ですか？ん〜、あっそういえば、エルフの若いのが居ました。女の子と言えるかは微妙ですが」

「まじですか！！」

エルフか、エルフなら美人のはずだ。

本当にいるとは。

「でも、エルフは値が張りますよ」

高いのか、相場がどれくらい分からないから分からん。

三万セールまでならいける。

「とは言っても、命の恩人ですしあのエルフは少々口が悪いので、

少し安くしますけど。一旦連れて来させますので少し待っていて下さい」

そう言つて、出て行つた。

エルフか、楽しみだな。

思わず笑みがでる。

「これは・・・」

思わず声が出た。

銀髪でつり目がちな緑眼のエルフが入ってきた。

ものすごく美人だ。

背は俺と同じぐらいで、細い。

何と言つてもスタイルがいい。

あの胸に顔を埋めたい。

「いかがですか。なかなかでしょう。ちなみに処女ですよ」

見とれているとオスカーさんが話し掛けてきた。

し、処女！

奴隷の価値に関わってくるんだろう。

唾を飲み込む。

是非とも欲しい。

「い、いくら何ですか？」

恐る恐る聞いてみる。

「ハヤト様には恩もありますし、二万セールでどうぞでしょう」

「買います!!」

即決した。

そう言いながら金貨二枚を渡す。

「ありがとうございます。では契約をしますから立って下さい」

すると近くにエルフが来た。

右手に着けている腕輪に手を持って行く。

オスカーさんが呪文を唱えると、腕輪が光った。

「これで、ハヤト様が主人になります」

びっくりしているとオスカーさんが話し掛けて来る。

「奴隷を解放したい時は出来ます。また、奴隷には住む所と必要な食事を与える義務があります」

そう言つて、解放の呪文を教えてください。

「えっと、俺はハヤト。これからよろしく」

「……………」

反応がない。

「え、君の名前は？」

「……それは命令ですか？」

「いや命令じゃないけど、教えて欲しいなと」

キリがないと思つたのか、不機嫌そうに答える。

「私はミルシアです」

それっきり黙ってしまった。

先が思いやられる。

俺は、オスカーさんに挨拶して、ミルシアを連れて外に出た。

とりあえずミルシアの装備を整えようと思つた。

「ミルシアって、魔法を使えるんだよね？」

「はい」

「何か武器って要るの？」

「ナイフ」

「防具は何か着けるの？」

「要らない」

「じゃあ、服は要るよね」

「要る」

会話が弾まない！

とりあえずナイフを買った。

五十セルルの安いのを買った。

多分護身用だろう。

ずっと魔法を使う訳にもいかないからな。

服屋ではフード付きのローブを買った。

他にも下着や普段着を買った。

百五十セルルになった。

一通り装備を整えたし、ギルドに登録しに行こう。

「ミルシア、ギルドに登録しに行くよ」

「はい」

さっきからミルシアは、はい、か、いいえ、しか言わなくなった。

悲しい、やっぱり奴隷として買われたから、嫌われてるのかな。

ギルドに入ると周りから注目された。

俺が美人のエルフといえるからだろう。

受付には昨日のミリアさんがいた。

「すみません、この子を登録したいんですけど」

「はい、この用紙に記入して下さい」

俺が登録料の十セールを払っている間に、記入し終わっていた。

名前だけで他は空欄だ。

まあいいか。

問題はないし。

「ミルシアさんですね。ギルドの説明はいりますか？」

「いいえ、俺が説明しときますから大丈夫です。ミルシア行くぞ」
そう言っつてギルドを出る。

向かいの宿屋に入ると、シミルさんがいた。

「すみません、二人部屋に変えてほしいんですけど」

「おや、奴隷でも買ったのかい？料金はこのままでいいよ。」

「ホントですか？ありがとうございます」

シミルさんに二人部屋に案内してもらうと、一人部屋と大きさはあ
まし変わらない部屋に、ベッドが二つ置いてあった。

「では、ごゆっくり。食事はもう大丈夫ですよ」

「じゃあ、今から食事にします」

俺はミルシアをつれて食堂に行った。

食べ終わって、風呂にも入って部屋に戻ると、ミルシアはもう出て
いた。

俺はミルシアにギルドの説明をした。

それが終わると、することがなくなった。

「あゝ、もう寝るか？」

そう言っつて自分のベッドに入って寝ようとしていると、後ろから話しかけられた。

「何もしないの・・・？」

「えっ」

驚いた、俺の気持ちを讀まれたかと思った。

「そりゃ、したいけど。ミルシアが嫌そうだったから」

「なんで？」

「えっ」

よく聞こえなかった。

するとミルシアはベッドに入って行った。

まあいいか。

俺も夢の世界に旅立った。

第7話 依頼（前書き）

いつの間にか、アクセスPV25000、ユニーク数5000、お気に入り登録200を超えていました。

日間ランキングにもランクインしていて驚きました。

みなさんお読みいただきありがとうございます。

これからもよろしく願います。

第7話 依頼

「ご、人」

ん？何か聞こえるな。

「ご主人様、ご主人様」

ご主人様？誰だこんなかわいい声にご主人様などと呼ばれている、
うらやましいやつは。

「ご主人様！ご主人様！！」

はっ！近くで殺気が。

身の危険を感じて飛び起きると、近くにミルシアがいた。

あの殺気はミルシアからなのか？

「とりあえず聞きたいことがある」

「何でしょう、ご主人」

俺が言うと、ミルシアは表情を変えずに答えた。

ご主人様？聞き間違いじゃないよな。

さっきから何回も聞こえてたからな。

「あゝ、まずそのご主人様ってのは何だ？」

「ご主人様が私を買ったので当然です」

ご主人様、ご主人様ってなんか変な感じになるな。

「そのご主人様ってのは止めてくれないか？」

「それはご主人様の命令でも無理ですね」

何故か反抗的になっている。

こんな感じだったかな？

「そ、そうか。それから、さっきの殺気は何だったんだ？」

さっきの殺気なんつって。

「何でもありません。それから面白くない事を考えないで下さい」

無表情で答えるミルシア。

怖！心を読まれた。

「心を読んだりしてません」

やっぱり読んでるじゃん。

買う奴隷間違えたかも。

顔で即決するんじゃないかった。

「朝食の時間ですよ」

ミルシアがメイドみたいになっていた。

朝食を食べると、ギルドで依頼を受けようと思ってギルドに向かった。

ミルシアの実力を見たいし、金も稼がないとダメだからな。

ギルドに着くと俺たちは、目立った。

全身黒づくめの俺に、ローブを着た美人のエルフのミルシアだからな。

視線が痛い。

主に俺への嫉妬の視線が。

男の嫉妬は醜いぞ。

視線を無視して、掲示板に行く。

ランクFからDの依頼書を見てみると、掃除とか、荷物持ちなどの、簡単な依頼が多かった。

Dにはいくつか討伐系の依頼があった。

魔物の名前はよく分からなかったので、ミルシアに聞いてみる。

「なあミルシア、討伐系の依頼でどれがいいと思う？」

「討伐系ですか？ならこれが初心者が最初に受けるのにいいと思います」

と言って、一枚の依頼書を指差した。

その紙を見ると、ゴブリンの討伐と書かれていた。

数は十匹、報酬は100セルが。

まあ、どんなのかやってみよう。

受付に持って行くいつものミリアさんがいた。

「これお願いします」

「はい、ゴブリン10匹の討伐ですね」

話し掛けると笑顔で答えてくれた。

やっぱり笑顔だよな。

隣のミルシアに睨まれた。

怖いな。

「はい、そうです」

「では、ゴブリンはこの町の裏にある森にいます。倒した証拠にゴブリンの耳を持って来て下さい」

耳か、えぐいな。

「分かりました、ミルシア行こう！」

「分かりました、ご主人様」

周りから殺気が集まる。

ご主人様っての止めてくれないと、俺の命に関わる。

町を出て裏に回るとすぐに薄気味悪い森が広がっていた。

「なあミルシア、ゴブリンってどんなやつなんだ？」

森の中を歩きながら聞く。

「えっ、ご主人様は、ゴブリンを知らないのですか？」

残念ながら知らないんだよな。

多分俺がやってたオンラインゲームに出てくるやつだろうが、詳しく

くは分からない。

「ああ、その事は後で詳しく話すから」

「分かりました。ゴブリンは小さい二足歩行でこん棒を持っている、醜いやつです」

ん、分かりにくいが想像のやつと同じだ。

「分かった」

少し森の奥に行くと、ゴブリンが10匹出て来た。

「ミルシア、魔法を使ってみて」

ミルシアの実力を知るために魔法を使わせる。

「分かりました」

そう言つて、集中するミルシア、綺麗だ。

思わず見とれていると、突然声がした。

「ウインドスラッシュ
風の斬撃」

見えない風が、ゴブリンに向かって飛んでいく。

風によってゴブリンを切り裂かれる。

「おお、やるじゃん」

俺は、残ったゴブリンに向かって走る。

双剣を自分で使うのは初めてだ。

2本の剣を抜く。

近づき流れる様に次々切り裂いていく。

「はあ、すげえ」

自分で自分のしたことに驚いた。

「ご主人様は、強いですね」

ミルシアが驚いていた。

自分でも驚いていた。

ミルシアもなかなか強いみたいだし、もっと強い魔物もいけそうだな。
な。

とりあえず、ゴブリンの耳をそぎ落とし袋に詰め込んでいく。

気持ち悪いな、これもやっていけばなれるのかな。

町に戻ると、ギルドに向かう。

ギルドに入るとミアさんにゴブリンの耳に渡した。

「はい、たしかに受け取りました。こちらが報酬の1000セルになります」

Dランクの依頼だったから、後一回で次のランクに上げられるな。

明日にでも、依頼を受けよう。

「じゃあ、また明日きます」

ギルドを出て、宿屋に戻る。

「お帰りなさい、ご飯はどうしますか？」

ニーナが話しかけてきた。

「ただいま。ご飯は今からもらいます」

思わずニーナの笑顔に笑う。

「ご主人様、気持ち悪いですよ」

何だよいいじゃないか、この無邪気な笑顔がいいんだよ。

その後ご飯を食べて、部屋に戻った。

第7話 依頼（後書き）

ご意見、ご感想などがありましたらどんどんお寄せ下さい。

励みになります。

第8話 情報（前書き）

アクセスPV100000、ユニーク20000突破しました!!!

日間ランキング6位、週間ランキングにも入ってました!!

お気に入り登録数も1000件超えました!

みなさん読んでいただきありがとうございます。

第8話 情報

部屋に戻ると、俺はベッドに座った。

ミルシアは、側で立っている。

「座ったら？」

俺が勧めるけどミルシアは首を振る。

しょうがないからそのまま話を切り出す。

「え〜と、俺の事だけど、ぶっちゃけると、俺は異世界つまりこの世界じゃない所から来たんだ。だからこの世界の事はほとんど知らない。だから色々教えて欲しいんだ」

「・・・それは、本当ですか？」

ミルシアは、怪訝そうに聞いてきた。

それはそうだ。俺もいきなり異世界とか言われたら怪しいと思う。

「まあ、これが現実なんだな。俺も信じたくないんだけど」

そう言って自嘲するように笑う。

「理解は出来ません」

やっぱり無理だよな。

「でも、ご主人様の言う事を信じることは出来ます」

本当か？

「本当に信じてくれるのか？」

驚いて聞く。

「はい、信じます。この世界の事を教えたらいいんですよ？」

「ああ、それに俺が分からない事で、変な事をしないように注意してくれ」

「分かりました。何も知らないご主人様が下手な事をして恥を搔かない様に注意します」

「そ、そうだが」

何も知らない訳じゃないんだけどな。

その後寝るまでこの世界の事を聞いた。

この世界はマルノーゼと言って、大きな大陸と小さな島々がある。

大陸には、大きな国が4つと小国がいくつがある。

俺がいる国は、大陸の国の1つのア スファルト王国と言って、王

政をしいていて、貴族もいる。

最大の領土を持っていて、この世界の中心だ。

他には、宗教の国、神聖ミルバル国。

この国は、魔法が盛んな国で内部の事がほとんど分からない、秘密主義の国。

農業の国イルファ。

この国は人口が多く、民主主義の国。

平和を求めて軍隊を持たない国だ。

魔物退治は冒険者に任せているようだ。

エストータルは工業が盛んな国。

ドワーフなどの異種族が多く住んでいる。

この4つの国と他の小国が大陸にひしめいている。

この世界では今、戦争は起きてない。

最近増えてきた魔物の対応で精一杯のようだ。

魔物は、何らかの魔力によって生きている生き物のことを言う。

魔物は知能が高いものは少なく、ほとんどの魔物が人を見たら襲ってくる。

中には、人の言葉を理解して人と共存している魔物も少ないがいる。

魔物以外にも馬のような普通の動物もいる。

これは、魔力を持っていないので、地球の動物とほとんど変わらない。

魔法は魔力量と魔力を魔法に変換する能力が必要なため、使える人は少ない。

魔法を使うには、まず周りの魔力を自分の中に取り込み、その魔力を利用して、魔法を使用する。

魔法には、呪文を唱えたり、魔法陣を使う等の方法があるのだが、慣れてくると単語で魔法を使える様になる。

ミルシアは短い単語で使っていたから、それなりに強い魔法使いなんだろう。

魔法には、基本属性の火、水、風、土、電の五つに、それぞれの強化属性の炎、氷、嵐、地、雷があり、他に光、闇、移動、空間、回復がある。

ミルシアは、水、風、土、氷、嵐、移動を使えるみたいだ。

俺は、魔力量が多いみたいだから魔法を使う事も出来るみたいだ。
多分ステータスを上げると使えるようになるんだろう。

俺は剣を極めるつもりだから魔法を使う予定はないけどな。

ステータスが何なのか気になってミルシアに聞いてみたけど、何の事か分からないようだった。

この世界にステータスの概念は無いようだ。

それが何で俺についているのか分からないけど、異世界からの召喚者だからだと思っておこう。

ステータスが無かったらこの世界で生きていけないからな。

この世界には、異種族がいる。

エルフや、ドワーフ、獣人などである。

エルフは、長い耳が特徴で、美男美女が多い。

1000年程生きるエルフもいる。

エルフは多くが森の中に集落を作って、他種族との関わりを断って生活している。

ドワーフは小柄で筋肉質、寿命は500年ぐらいだ。

ドワーフは鍛冶をしている者が多い。

獣人は、動物の耳やしっぽが特徴で、身体能力や五感が鋭かったりする。

獣人は能力を生かして冒険者になる者が多い。

異種族に対しては、人間たちから差別があったりする。

お金は、世界統一でセール。

やっぱり1セール1000円ぐらいのようだ。

半銅貨が1セール、銅貨が10セール、半銀貨が100セール、銀貨が1000セール、金貨が10000セールだ。

俺が今持っている9900セールあれば当分は十分に生活できる額だ。

これがミルシアに教えてもらった、この世界の情報だ。

ミルシアは、話し終わるとすぐに寝てしまった。

俺は、ミルシアからの情報を頭でまとめていると遅くなった。

寝ようと思いいベッドに向かうと、隣のミルシアが目に入る。

無用心にきれいな顔をさらして寝ている。

つい、襲いそうになった。

昨日あんな事を言ったからには、手を出せない。

俺は悶々と朝まで過ごした。

第9話 異常

「ご主人様、起きて下さい」

ミルシアに起こされる。

「・・・ああ、おはよう」

昨日は悶々としてあんまり眠れなかったから眠い。

そうも言ってられないから、今日も朝食を食べてギルドに向かう。

ギルドに入るとまた嫉妬の視線が集まる。

視線をスルーして掲示板に向かう。

ギルドのランクを早く上げたいからまたDランクの依頼を受けたいな。

「今日もDランクの依頼を受けたいんだけど、ミルシアはどれがいいと思う?」

「そうですね、これなんかどうでしょう?」

そう言って指差す依頼書には、『シャドウウルフの群れ討伐』とあった。

報酬は1匹につき10セールで、場所は昨日と同じ町の裏の森の奥みたいだ。

「シャドウウルフの群れってどのくらいの数なの？」

ミルシアに聞いてみる。

「2、30匹が普通かと思います」

「それなら結構儲かるな・・・って2人するには数多くない!？」

2人で2、30匹は多いだろう。

「ご主人様なら大丈夫です!！」

「何にこやかに言ってるの、俺に丸投げか!？」

「・・・・・・・・」

「はあ、ミルシアも手伝えよ」

まあ、Dランクだし大丈夫だろう。

依頼書を持って受付に行く。

いつもの様にミリアさんの所に行く。

すでにミリアさんが担当みたいになっている。

「この依頼を頼みます!」

依頼書を見ると、ミリアさんは驚いた顔で俺達の事を見てきた。

「おふたりで大丈夫なんですか？」

「やっぱりもつと大人数用じゃないのか!？」

「いや、多分大丈夫だと思います」

「大丈夫です。ご主人様ならこの程度一瞬です」

ミルシアが自信満々に言ってくれた。

ミリアさんも苦笑いじゃないか。

「・・・と、とりあえず大丈夫だからお願いします」

「分かりました、シャドウウルフの証拠は牙です。気をつけて行ってきて下さい」

ミルシアを連れてミリアさんから逃げる様にギルドから出た。

森に向かいながらミルシアにシャドウウルフの説明を受ける。

「シャドウウルフは人間の腰ぐらいの小柄で黒い毛並みです。知能は以外と高く群を作り、連携して獲物を囲んで狩ります」

「連携するのが厄介だな。なるべく囲まれない様にしないとな」

「ご主人様、私を守って下さいね？」

「自分で戦わないつもり!?」

「もちろん魔法を使って援護はします」

「頼むよ！ミルシア！群れだったら魔法の方が効果的なんだからな」

「・・・ご主人様の剣の腕なら問題ないと思いますが」

「そうかもしれないが援護は頼んだぞ！」

「分かっています」

森に着いて奥に向かっていくと、いきなり前からゴブリンが出てきた。

「ミルシア！」

ミルシアに呼びかける。

「頼みます」

頼まれた。

1匹だったので右手で剣を抜きながら近づき、剣をふる。

ゴブリンは反応出来ずに血を出して倒れる。

「なあ、ゴブリンって集団行動するんじゃないっけ？」

基本的に弱い魔物は集団で行動する。

「そのはずなんですが、周りには居ないです。おかしいですね」

「1匹だけはくれたのかな？」

「まあ、考えても仕方がないから行くっせ！」

そう言っただけで歩き出す。

「ミルシア、シャドウウルフの居場所はまだなの？」

少し歩いていると暇になった。

まだ着かないのか。

「まだまだです！さっきから何をキョロキョロしてるんですか？」

「だって暇なんだよ！」

その時、前方から何かが走って来る音がした。

複数だ！

「なんだ!？」

驚いていると前の茂みから黒い塊が飛んできた。

「まだじゃなかったのか！」

俺は後ろに避けながら叫ぶ。

「ミルシア!! 援護頼む！」

「了解です」

冷静な声に安心して目の前のシャドウウルフに剣を抜きざまに切る。

前から20匹ぐらい迫って来る。

ウォーターボール
「水砲！」

後ろでミルシアの声が聞こえた。

水の塊が飛んでいって、何匹かのシャドウウルフに当たる。

当たった奴らは飛んでいく。

以外と威力があるみたいだ。

俺も走りだす。

目にも止まらない速さで進む。

近くにいたやつに右手の剣を振り下ろす、そのまま回転して左手の剣で周りを薙ぐ。

「おらっ！！」

2、3匹が血を出して崩れ落ちる。

「ウインドスラッシュ
風の斬撃！」

ミルシアが言っていると空気を切り裂く様な風を感じる。

また数匹が血を出して倒れる。

残った6匹が俺を囲む。

俺はまずいと思って前にいる奴に向かう。

他の奴らが俺に向かって来るが無視する。

前の奴に近づいて顔面に剣を走らせる。

返す力で後ろに飛び掛かってくるのを叩き落とす。

残りの4匹も流れる様に切る。

「流石ですご主人様」

シャドウウルフを全て倒すとミルシアが言ってきた。

「ミルシアの援護も助かったよ！」

「このくらい当然です」

少し嬉しそうに言う。

俺は調べたい事があったからミルシアに証拠を集めてきて貰う。

ミルシアが離れると、俺は「ステータス」と念じる。

もう敵を結構倒しているからレベルが上がっているんじゃないかと思っただ。

シバタ ハヤト

Lv.5

人間

自由民

17歳

平民

体力 100

筋力 999

知力 001

耐力 100

俊敏 999

器用 800

振り分けポイント 60

スキル

片手剣 100

双剣 100

ナイフ 10

隠密 100

ステータス確認

魔法

装備

黒い外套

ミスリルの剣

ミスリルの剣

皮の靴

レベルが5になっていた。

振り分けポイントの60はステータスに振り分けられるんだろう。

何に振り分けようかな。

やっぱり、死にたくないから体力とか耐力に振り分けよう。

どうやって振り分けるんだ？

30ずつ体力と耐力に振り分けるように念じる。

出来た！

体力と耐力は今まで全然上げてなかったからこれから上げよう。

ステータスを見ていると、ミルシアが戻ってきた。

「ご主人様どうしました？」

「いや、何も無い、そういえばシャドウウルフってこんな近くに出るの？」

「もっと奥に居るはずなんですが、何故かは分かりません」

「分からないか。まあ、考えても仕方がないから帰ろう！」

何だか嫌な予感がする。

言うと町に向かって歩き出す。

以外と近くでシャドウウルフに会ったから、予想より早く森を出られた。

町を見ると、煙が上がっていて、叫び声が沢山聞こえてきた。

第10話 危機（前書き）

遅くなりましたすみません（ー；ー；）

第10話 危機

「何が起きてるんだ・・・」

町から聞こえてくる悲鳴に呆然としてつぶやく。

隣でミルシアも啞然としている。

こうしていても、どうしようも無い。

何が起きているのか調べようと思いきミルシアに声を掛ける。

「ミルシア、とりあえず町の中に入ろう！」

ミルシアを連れて町に入ると魔物が沢山いるのが見えた。

その魔物たちに人が襲われている。

何故、町に魔物がいるのか？何でこんなに沢山いるのか？

俺は余りの光景にそんな疑問も吹き飛び、近くの魔物に向かう。

「ご主人様！」

ミルシアの声がする。

「ついて来い！あと出来るだけ魔物は倒せ！」

俺は2本の剣を抜きながら言う。

近くにいたゴブリンを次々倒す。

通りを中心に向けて走り出す。

とりあえずギルドに行こうと思った。

後ろからミルシアもついてくる。

魔物が多過ぎる、何が起きているんだ。

魔物たちの中に突っ込み右の剣でゴリラみたいな魔物を切り、左では木みtainな魔物を切断する。

続けて、4、5匹倒す。

だが、キリがない！まだ周りには魔物がいっぱいいる。

後ろからは強力なつむじ風が起きていた。

ミルシアか！助かった。

魔物たちが飛ばされる。

周りを見ると魔物の死体と一緒に人も沢山倒れている。

そんな光景から無理矢理目を離し先を急ぐ。

ギルドを目指しつつ何度か魔物を倒す。

途中で冒険者と思われる人が何人か魔物と戦っているのを見て、安心する。

町の中心に近づくと連れ魔物が増えてくる。

ギルドが視界に入った時、目に知っている人が入った、ニーナだ！知り合いが無事なのに安心して近付こうとすると、突然ニーナに飛び掛かる魔物の姿が目に入る。

くそっ！ここからじゃ走っても間に合わない！

俺は咄嗟に右手を振りかぶりニーナに飛び掛かっている魔物に向かって剣を投げる。

剣は物凄い速さで飛んでいき、魔物の胴体を貫く。

魔物はそのまま倒れる。

俺はニーナに駆け寄る。

「ニーナ！大丈夫か！？」

俺が声をかけると、呆然と顔を上げた。

俺の顔を見ると、突然泣き出した。

「・・・ハヤトさん、んんっ、こわかったです」

そう言って抱き着いてきた。

突然の事に焦る。

「もう、大丈夫だ!」

俺はニーナを抱き寄せて言った。

しばらくそうしていたが、このままでは危ないし、ミルシアの視線が痛くなってきたからギルドに向かう。

ギルドには結構な人がいた。

誰かに話しを聞こうと思いい中を見渡すとミリアさんが居た。

ニーナを抱える様にしてミリアさんに近づく。

「ミリアさん!何が起きているんですか!??」

「ああ、ハヤトさん!無事でしたか。私もよく分からないのですが、魔物が沢山町に侵入してきたみたいです」

シャドウウルフが近くに居たのもその影響なのだろう。

「今、ギルドの冒険者達はどれくらいいるのですか?」

ミルシアが聞く。

「余り多くありません。依頼で町を出ている人が多いですから」

「それはまずいんじゃないか!??」

「いえ、今近くに居た王都の兵が来て魔物と戦っているので町の魔物はそのうち全滅するでしょう」

それならひとまず安心か。

「俺達も助太刀に行くか！」

ミルシアに声を掛ける。

「そうですね」

「ミリアさん、ニーナを頼みます」

ミリアさんにニーナを渡してギルドから出る。

「ご主人様、これを」

そう言って俺が投げた剣を渡してくる。

「おお、ありがとう」

外に出ると右手の方が騒がしかった。

「向こうに行くぞ！」

ミルシアに言っ走り出す。

少し行くと魔物が多くなってくる。

更に魔物と戦う白い鎧姿が何人かいた、あれが王都の兵だろう。

そこは、兵に任せて騒ぎの元へ急ぐ。

騒ぎの中心に着くとそこには、優に3メートルは超えるでかい人型の魔物がいた。

顔は醜く歪んでいて、手にはどこかの木をそのまま抜いたんじゃないかというほど大きい木が持たれていて、全身から物凄い威圧感を放っている。

その怪物の前には、赤いマントを纏った、綺麗な金髪の少女がいた。

俺と同じぐらいの年で、レイピアと魔法で奴を攪乱している。

だが、たいしたダメージは与えられてないみたいだ。

周りで呻いている鎧の兵は奴にやられたんだろうか。

ミルシアは魔物の威圧感に動けなくなっている。

その時、動きが鈍った少女に魔物が振り回す木が迫る。

俺は咄嗟に飛び出す。

「……あっ！」

ミルシアが何か言っているが気にしない。

両方の剣を抜きながら少女と怪物の間に割り込む。

迫って来る木を剣をクロスにして防御する。

「くそっ！強い！」

耐え切れず少女と一緒に飛ばされる。

「ぐっ！」

「きゃっ！」

俺は空中で体を捻って着地する。

「おい！大丈夫か？」

後ろで倒れている少女に無事か確認する。

「うっっ、・・・あんたは？」

とりあえず無事だったから質問は無視して魔物に向かう。

俺は剣を持ち直して魔物に向かって走る。

魔物は俺に気づき持っている木を横から振る。

俺は跳んで避ける。

そのまま足元に潜り込み脛に剣を叩きこむ、血が吹き出しよろめく。

もう1度切ろうとしたら背後から木が迫ってくる。

チッ！

舌打ちして横に避ける。

余りダメージを与えられていない。

また足を切ろうかと思ったが、時間が掛かり過ぎると考え、首を狙う事にする。

魔物の攻撃を避けながらタイミングを計る。

魔物が木を横から振り回してくる、タイミング良く木の上に跳び、木を踏み台にしてより高く跳ぶ。

「おらあああー!!！」

首に向かって2本の剣を揃えて振る。

風圧で予想より跳び過ぎる。

強い衝撃が来る。

顔に剣がめり込んでいた。

「グギヤアアアアアー!!！」

力を込めて振り抜こうとすると、剣が2本とも根元から折れる。

「えッ!？」

口から驚きの声を出しながら地面に向かって落ちていく。

このままじゃまずい。

エレキショック
「電撃」

後ろから声が聞こえると、すぐ横に光が走った。

光は魔物の顔に吸い込まれて、俺の剣が残っている傷口に命中する。

「ギヤアアアアアー！」

魔物は叫び声を上げてゆっくり倒れる。

俺は先に地面に下りていたから巻き込まれない様に逃げる。

あの魔法は誰が？

分からないので、とりあえずミルシアの所に戻ろうとすると、目の前にさっきの金髪の少女が立っていた。

第10話 危機（後書き）

感想お待ちしています。

これからもよろしくお願いします。

第11話 王女

「アンタ何者なの？」

目の前の金髪の少女はいきなり何者が聞いてきた。

異世界から来たと気づかれたか？

いやさすがにそれは無いだろうと、自分で否定する。

「何者って、ただの冒険者のハヤトって言います」

とりあえず、無難な自己紹介をする。

すると、突然目の前が光ったと思ったら、地面から煙が出ている。

「うわっ！」

驚いた。

さっきの魔物に止めをさしたのは彼女か！

「って、急に何すんだ！」

当たったら危ないだろう。

「ふざけないで。Aランクの冒険者パーティーでも倒すのが難しいオーガを、たった1人で倒す人がただの冒険者の訳がないでしょう」

あのでかい魔物はオーガだったのか。

「いや、1人つて、止めは君が刺したんだらう?」

「剣が壊れなければあのまま倒せたんじゃないの!」

ん、多分倒せただろうね。

つて言うか剣、両方とも壊れてしまった。

また買わなきゃならないのか。

「い、いや、たまたまですよ」

まずいな、怪しまれている。

「ご主人様は、田舎から出てきたばかりで自分の凄さが分かってないのです」

俺がどうしようか考えていると、ミルシアが助け舟を出してくれた。

「えっ、アンタは何よ?」

「私はその方のメイドです」

メ、メイド!?

まあ、いいか、実際そんな感じだし。

「そ、そう、こいつは俺のメイドのミルシア」

「……………本当なの？」

怪しまれてるよ。

「まあ、いいわ。改めてお礼を言っておくわ。助けてくれてありがとう。あたしはアースファルト王国第二王女エルメナ・アースファルトよ」

えっ!？

聞き間違いかな、王女って聞こえた気がした。

「お、王女？」

ミルシアも王女って聞こえたみたいだな。声を失っている。

こんな言葉使いの王女っているのか？

「え〜と、王女様は何でこんな所にいらっしやるのですか？」

とりあえず、慣れない敬語で話す。

「んっ!その話し方止めてくれる?さっきまでの話し方でいいから。そういう堅苦しいの苦手なの。」

それでいいのか王女様…………。

「あたしは、この町の近くいたとこに町が魔物に襲われているって知らされたから、あたしの部隊を率いて、魔物退治にきた訳よ」

「周りで倒れているやつとか、向こうで魔物と戦っているのは、エルメナ姫の率いる部隊のメンバーと言う訳だな」

「ええ、そうよ。あたしのことはエルメナでいいわよ」

「いいのか？一応、王女だろう」。

でも本人に言われたら仕方がないな。

「分かったよ、エルメナ。とりあえず近くに魔物は居そうにないから、ギルドに戻ろう」

「・・・本当に呼ぶなんて・・・」

俺が言うとエルメナが俯いて、何か言っているが聞こえない。

まだ呆然としているミルシアを正気に戻す。

「ミルシア、とりあえずギルドに戻るぞ！」

「はっ！王女様って言うのは？」

話しに着いて来てないのか。

「とりあえずギルドに行くぞ」

ギルドに向かいながらミルシアに事情を話してやる。

そついや周りの兵達、置いてきてよかったのかな？

ギルドに戻るとさっきより人が減っていた。

中に入ってミリアさんを探す。

「・・・いないな」

見当たらなかったから近くにいるギルドの職員っぽい人に今の状態を聞く。

「町に入っていた魔物は、王国の兵と冒険者のおかげで全て倒されました。今は、怪我人の治療と町の修復を急いでいます」

「ありがとうございます」

礼を言うとは何処へ去って行った。

「もう、魔物達は全滅したみたいだな。」

「そうみたいね、もっと早く来ていたら良かったんだけど」

「いや、来てくれただけで十分だろ」

「そうです、この冒険者だけだったらもっと時間が掛かったはずです」

俺が否定するとミルシアも続いた。

俺はふと、疑問を投げかける。

「なあ、魔物ってこんな群れで町を襲ったりする物なのか？」

「いえ、私は聞いた事がありません」

ミルシアにも何故かは分からない様だ。

「多分、最近魔物が増えてきているのが原因じゃないかしら。あたし達も増えた魔物が町を襲わない様にこのあたりに来ていたのだし」

「じゃあ、他の町でもこんな事があったのか？」

「いや、こんなに大規模なのは初めてよ。他は魔物が何匹か町に紛れこんだって感じよ」

「じゃあ、何で？」

「今回は、あのオーガに着いて他の魔物も町まで来たみたいね。オーガなんかの強い魔物は、自分の縄張りから滅多に出で来ないんだけどね」

エルメナは困った様に言う。

「そういえば、魔物が最近増えているって、どう言う事なんですか？」

そう、そこが問題だ。

「噂だけれど、神聖ミルバル国が異世界から勇者を呼んだらしいわ。」

その影響らしいの、失敗したみたいだけれど」

「へっ!?!」

「はい?」

俺とミルシアから変な声が出た。

「どうしたの?」

エルメナが何事かと聞いている。

その勇者って俺じゃね!?!

異世界から呼んだとか言ってたし……いやっ!まだ断定するのは早い。

「そ、その召喚っていつ行われたか知ってる?」

「詳しいことは知らないけど、魔物が増え始めたのが1ヶ月前だからそのぐらいじゃないの?」

俺が来たのは4日前だから違うのか?

いや、エルメナも詳しいことは知らないって言ってるし、まだ分からないな。

「なあ、エルメナ、その事について何か分かったら知らせて貰えないか?」

「一国の王女様がご主人様みたいな人の為にわざわざ動く訳がないでしょう」

ミルシアに言われる。

分かっているが一応だよ、一応！

「いいわよ」

えっ！

「あたしもこの件には興味があつたの。何か分かつたらアンタにも教えてあげるわ。アンタ達はまだこの町に居るんでしよう、何か分かつたらあたしの部下を遣わすわよ」

「本当か！ありがとうエルメナ。それからアンタつての止めてくれないか、ハヤトでいいぞ！」

「うっ、えくと、分かつたわよ・・・は、は、ハヤト」

エルメナは顔を真っ赤にして言った。

か、かわいいな、この野郎！

「じ、じゃあ、あたしは部下を回収しないといけないから」

心の中で意味分からん事を言っているとエルメナが去ろうとしていく。

「ああ、分かつた。いろいろありがとな。怪我しないようにしろよ

「！」

「お気をつけて」

俺とミルシアが言いつと去って行った。

第11話 王女（後書き）

感想などがありましたらどんどんお寄せください。

第12話 ミルシア(前書き)

アクセスPV3000000ユニーク数500000!!
みなさんありがとうございます。

今回は途中でミルシア目線があります。

第12話 ミルシア

エルメナが去ってどうしようか考えていると、声を掛けられた。

「あつ！ハヤトさんとミルシアさん」

ミリアさんが小走りで近寄ってくる。

「ああ、ちょうどよかった。ニーナは大丈夫ですか？」

「はい、今奥の部屋で休んで貰っています」

あんな事があって、ショックを受けてなければいいな。

俺は、もう慣れてしまったのかな？

何だかもう昔の自分に戻れない気がする、まあ、元の世界には戻る気は無いから、いいんだけど……。

「今からニーナに会えたりします？」

「ええ、大丈夫ですよ。ちょうどハヤトさんにニーナさんを送ってもらおうと思っていましたから」

ミリアさんはギルドの奥に入っていく。

ギルドの奥には入ったことがなかったけど、廊下の左右に部屋があって、奥行きも結構あり思っていたより広い。

ミリアさんはその部屋の一つに入っていく。

俺とミルシアも後から入る。

部屋は白いベッドが置いてあるだけの簡素な作りで、病院を思い出させた。

ベッドの一つにニーナは腰掛けていた。

「ニーナさん、もう落ち着きましたか？」

ミリアさんが声を掛ける。

「ああ、ミリアさん、大丈夫ですよ。」

そう言ってこっちを見て俺達に気づく。

「ニーナ、大丈夫だったか？」

「あっ！・・・は、ハヤトさん、大丈夫ですよ。」

ニーナは顔を俯けて言う。

「本当に大丈夫なのか？」

俯いているから大丈夫じゃないんじゃないか、と思いニーナの顔を覗き込もうとする。

後頭部に衝撃が！

俺はしゃがもうとしていたから、耐え切れずに床にキスしてしまっ
た。

「うっっ……何すんだ!!」

後ろを振り向くと、腕を振り下ろした恰好のミルシアがいた。

「今のは女心を理解していないご主人様が悪いです」

何だそりゃ？

「そうですよ、ハヤトさん。大丈夫と言ったら大丈夫なのです」

ミリアさんまで言ってくる。

完全に俺が悪者か……。

まあ大丈夫ならいいか。

「えっと……何かゴメンな、ニーナ」

「ええ、大丈夫ですよ」

あははは、と笑いながら言うニーナ。大丈夫ならいいか。

「ニーナさん、すぐ近くですけれどハヤトさん達に宿まで送って貰
おうと思っています」

「そんな、一人で帰れたのに」

「いやいや、俺達もニーナの宿に泊まっているし、ニーナの事も心配だったから」

「あ、ありがとうございます」

ニーナは顔を真っ赤にしていた。

そんなに真っ赤にされると俺も恥ずかしいんだけど。

二人でモジモジしていると、ミルシアが話しを進める。

「ニーナさん、早く宿に戻りましょう」

「はっ、ええ、行きましょう」

「そうだな、もう暗くなり始めてるし、早く帰った方がいいだろう」

ミリアさんは他の人にも用があると言って他の部屋に行った。

俺は、二人を連れてギルドを出る。

ギルドの前にある宿は、あんまり魔物の被害を受けていない様だ。

宿に入ると、シミルさんがニーナに駆け寄って来る。

「ニーナ！何処行ってたの、心配したんだよ！」

「ごめんなさい。ハヤトさんに助けてもらったの」

その言葉にシミルさんが俺の方を見る。

「迷惑をかけて済まないね」

そう言って頭を下げてくる。

「いえ、とにかく無事でよかったです」

「今日の夜ご飯は豪華だよ、町を守ってくれた冒険者達にご馳走を
つてな」

「それは、楽しみだな」

「私たちはこれで、ニーナ行くよ！」

ニーナはシミルさんに引きずられて行った。

夜ご飯は本当にご馳走でおいしかった。

周りでは、冒険者達が祝いだ、と騒いでいた。

俺は、犠牲になった人達のことを思い祝う気にはなれなかったから、
早めに食堂を出た。

当然の様にミルシアも着いてくる。

部屋に戻りベッドに座って、今日の事を考えていると、ミルシアが
俺の前に座って話がありますと言ってきた。

私の家は貧乏だった。

エルフなのにエルフの村で暮らさないで、人間の町で暮らしていたからだ。

エルフだと言うだけで差別を受けた。

親がやっていた服屋も、エルフがやってる店だと言って買ってくれ
る人は少なかった。

私は20になる直前に奴隷商に売られた。

とうとう家が限界になったのだ、弟や妹もいたし私は自分が奴隷な
ると言い奴隷になった。

それまでは冒険者をしたりしたことあつたけど魔法しか使えない
し、一人ではたいした依頼は受けられないから家の足しになつてい
なかつた。

奴隷商では、腕輪を付けられて言うことを無理矢理聞かされた。

私は、毎日人間を恨んだ、私達エルフを差別した人間を。家族を恨
んだ、無理に人間の町で暮らそうとした親を。何よりそんな運命を
恨んだ。

私は、奴隷商の人に反抗的だった。

そのせいか、なかなか売られなかった。

売られないならその方が良いと思った。どうせ買われても慰み者と
して男に玩ばれるだけだから。

でもそんな願いも叶わない。

ある日ある部屋に連れていかれた。

「これは・・・」

私が入ると黒髪黒目の私より年下と思われる少年が座っていた。

私はこんな奴に買われるのか、と絶望した。

「いかがですか。なかなかでしょう。ちなみに処女ですよ」

「い、いくら何ですか？」

「ハヤト様には恩もありますし、二万セールでどうでしょう」
「買います!!」

私が絶望しているといつの間にか買われる事になっていた。

「ありがとうございます。では契約をしますから立って下さい」

私は仕方なく少年に近く。

少年が私の腕輪に手を当てると奴隷商人が呪文を唱える。

私の体中を嫌な感覚がはしる。

「これで、ハヤト様が主人になります」

「奴隷を解放したい時は出来ます。また、奴隷には住む所と必要な食事を与える義務があります」

奴隷商が説明している。

「えっと、俺はハヤト。これからよろしく」

少年が話し掛けてくる。

「……………」

当然無視する。

「え、君の名前は？」

奴隷に慣れてないのか命令かどうかわからない言葉で聞いてくる。

「……それは命令ですか？」

「いや命令じゃないけど、教えて欲しいなと」

意味が分からない。

言わないとずっと待ってそうだったから答える。

「私はミルシアです」

少年に付いて行く。

「ミルシアって、魔法を使えるんだよね？」

「はい」

「何か武器って要るの？」

「ナイフ」

「防具は何か着けるの？」

「要らない」

「じゃあ、服は要るよね」

「要る」

質問には最低限の言葉で答える。

武器や服を買い与えられる。

ギルドにも登録したし、一応戦わずつもりみたいだ。よかった魔物を倒す事で気分転換ができる。

「あゝ、もう寝るか？」

宿に連れて行かれて夜になりギルドの説明を終えた少年が、私に言う。つてくる。

そう言って自分のベッドに入って寝ようとしている。

「何もしないの・・・?」

私は思わず聞いていた。

「えっ」

何を余計な事、言っているんだろう。

「そりゃ、したいけど。ミルシアが嫌そうだったから」

意味が分からない。

「なんで?」

私は混乱していた。

「えっ」

少年が何か言っているが、無視してベッドに入った。

少しすると、少年の寝息が聞こえてきた。

本当に何もしてこなかった。

奴隷として売られる時から、自分の純潔を好きでもない奴に奪われる事を、覚悟していたのに。

あの少年が何を考えているのか分からない。

でも、私は安心してしまった。

いい人を買われたんだと思った。

私はちゃんと少年の奴隷らしくしようと思った。

ご主人様が、自分は異世界から来たと言われた。

私は意味が分からなかったけど、ご主人様のことを信じると決めていた。

奴隷の私に一人の人間として接してくれた、そんなご主人様だから。

町に戻ると町が魔物に襲われていた。

私は、ご主人様が走って行くのに付いて行くだけで精一杯でした。

ニーナさんを助けて、騒ぎの中心に向かうと3メートルを遥かに超えるオーガがいました。

私は、見た瞬間思考が固まりました。

ご主人様がオーガの前に出て行く時も見ている事しかできなかった。

「私はその時、ご主人様が遠くに行ってしまうと思いました。私にはご主人様しかいません、そのご主人様にまで置いて行かれるなんて……」

ミルシアは悲しそうに言う。

「そんなことは無いよ。ミルシアは十分上手くやってくれているよ。戦闘以外でも助かってるし」

「ごまじ、……ハヤト様」

ミルシアがやっとハヤト様と呼んでくれた。

俺はミルシアを抱き寄せる。

「これからもよろしく頼むな、ミルシア」

「私こそ、ハヤト様」

俺とミルシアはベッドに倒れ込む。

長い夜が始まった。

第12話 ミルシア（後書き）

感想お待ちします。

第13話 魔剣

朝起きると隣にミルシアが寝ていた。

昨日はあの後何度もぐっごほっごほっ、結局、起きるのが遅くなっ
てしまった。

窓を開けて換気をする。

「ふぁー、いい天気だな」

さて、ミルシアを起こすとするか。

俺は、ミルシアの寝ているベッドに近いて声を掛ける。

「おーいミルシア、朝だぞ」

ん、全く起きる気配なし。

ミルシアの肩に手を伸ばし、揺さぶる。

「ミルシア、早くおきろ」

んっ、これでも起きないか、しょうがないから最後の手段といくか。

気持ち良さそうに寝ているミルシアの顔の近くに、俺の顔を持って
行く。

そのまま近づいて……。

可愛いやつだな。

「ミルシア待てよ！もう朝飯の時間は過ぎてるぞ」

俺は急いで後を追いかける。

朝飯は、外のどこかの露店で買って食べることにした。

町はまだ昨日の傷跡が残っていたけど、店は結構やっていた。

露店もいくつが出ていた、そのうちの一つから匂ってくる肉のいい香に、誘われて近づいて行く。

「ミルシア、あれでいいか？」

露店を指差しながら聞く。

「はい、いいですよ」

俺は露店のおっちゃんに話し掛ける。

「すみませ〜ん、これ二人分」

「あいよ！少々お待ち」

そう言って、鉄板の上のお好み焼き？を皿に盛り付けてくれる。

「はい！お待ちどうぞ、10セールだよ」

俺は10セールを渡してお好み焼き？を受け取る。

一つをミルシアに渡して食べてみると、広島風のお好み焼きみたいな感じだった。

「ん〜、美味しい」

「はい、美味しいですね」

「そういえば、昨日の依頼の報酬をもらってないな、今からでも貰えるのかな？」

「んー、わかりませんね、とりあえずギルドに行ってみるべきですね」

俺達は食べ終わると、ギルドに向かう事にした。

そういえば俺の剣、両方共折れたんだな、また買わなきゃな。

ギルドに着くと昨日の人ばかりは、すっかり無くなって普段通りだった。

中に入って受付に向かっていると、横から声が聞こえてきた。

「ハヤトさん！」

声の方を見ると、ミリアさんが手を振っていた。

俺達はミリアさんの所に行く。

そこは、机と椅子が置いてある休憩スペースみたいな所だった。

「ちょうどよかった、ハヤトさん貴方を探してたんです」

「俺を？」

「ええ、昨日あの後エルメナ王女が貴方にこれを渡して欲しいと」

そう言っつてミリアさんは、筒状の袋を渡してくる。

「これをですか？何だろう？」

何だか分からないまま袋を開けると、中から剣が二本出てきた。

「これは！」

「あの時、壊れたのを気にしていたんでしょうね」

二本の剣は片方は柄が青で、もう一方は柄が赤かった。

鞘には綺麗な装飾がされていた。

剣からは不思議と力が感じられた。

「なあミルシア、この剣って……」

「はい、恐らく魔剣でしょう。赤い方は火、青は水だと思います」

マジ！魔剣って高いんじゃないの。

「こないいい物を貰っていいのかな？」

「ハヤトさんは、王女を助けたのでしょう、それくらい普通ですよ
俺が遠慮していると、ミリアさんが言ってくる。まあ、新しいのを
買うつもりだったから、ありがたく貰っておこう。」

「それから、ハヤトさんはギルドランクBになります」

「え！」

「え！」

ミルシアと被った。

「何でもうBなんですか？まだ依頼も少ししか受けてないのに」

「それは、昨日ハヤトさんがオーガを倒したと聞いた為です。オー
ガは相当強いのでBランクで問題無いと、判断しました」

ああ、あのオーガか、たしかに強かった。

「それから、オーガの討伐の報酬の10万セールです」

「「！「！「！「！「！」

驚き過ぎて声が出なかった。

てか、俺この頃驚いてばっかりだ。

「じゅ、10万セールですか？」

「はい、オーガですから」

マジっすか。

ミリアさんから10万セールを貰う。

「ランクBになりましたら、ダンジョンに入る事が出来ます」

「ダンジョンですか？」

「ええ、魔物が沢山いる洞窟などです。魔物が多いので、ランクC以下の冒険者には遠慮してもらっています」

「分かりました。また、行ってみたいと思います」

俺達は、貰ったお金の多さに呆然としながらギルドを出た。

第13話 魔剣（後書き）

感想待ってます。

第14話 平和(前書き)

40万PV達成!!

ありがとうございます。

ちょっと忙しいので2週間ほど更新が余り出来ないかもしれません。

第14話 平和

ギルドで大金を貰った後、まだ昼だったけど昨日は大変だったから、ゆっくりする事にした。

さっき朝飯食ったばかりだけど、もう昼飯を食う事にする。

店を探しながら町をうろついていたら、5、6人の冒険者達が歩いていた。

「新しく見つかったダンジョンに行こうぜ！」

「ええ、この人数なら大丈夫でしょう」

「ダンジョンでがっぱり儲けようぜ」

彼らは、ダンジョンに行くみたいだ。

俺も明日行ってみるかなと、思って見ていると、彼らの中にスンを見つけた。小さいから気づかなかった。

仲間と上手いことやってるみたいだな。絡まれていたから心配してたけど、大丈夫そうだな。

「ハヤト様、どうしましたか？」

俺が立ち止まっていたらミルシアが不思議そうに聞いてくる。

「いや、何でもないよ」

俺はスンから目を離して歩き出す。

「そうだ、昼は何食べる？思ってもいなかった収入があったから少々高くてもいいぞ」

「いえ、これと言って食べたい物は無いですが、高い店なら町の奥に有ります」

「なら、そこに行ってみようか？」

「そうしましょう」

歩いているとミルシアに男から視線が送られて来る。止める！ミルシアは俺のものだぞ。もう渡さないからな。

ミルシアは視線を気にして無いのかスタスタ歩いて行く。

俺は周りの男達を睨みつけてミルシアを追う。

町の奥には、高そうな店や、大きな家が多かった。

ミルシアは、レンガ作りで、綺麗ないかにも高級そうな店の前で止まった。

「ここなんかどうでしょう？」

別に嫌な理由もなかったから頷いた。

中は広い割にテーブルは少なかった。

ウェイトレスに案内されてテーブルに座る。

適当にコースを頼むと、ウェイトレスは下がった。

「明日、ダンジョンに行きたいんだけどいいか？」

「ええ、せっかくBランクになったのですから行きましょう」

「そういや、さっき新しいダンジョンが見つかった、とか言ってるのを聞いたけど、ダンジョンって結局の所何なんだ？」

「ダンジョンですか？・・・そうですね、魔物が沢山いる洞窟や森ですかね」

「洞窟や森に沢山魔物が居たらダンジョンになるの？」

「いえ、正確にはダンジョンには一体の強力な主が居ます。主を中心に弱い魔物が沢山集まって、ダンジョンになるのです」

「主ってのは、どれくらい強いのか？」

「そうですね・・・最低でもオーガくらいかと、大抵は十人単位で挑みますから、ドラゴンとかですね」

「最低でもオーガか・・・」

話をしていると、料理が運ばれて来た。

料理はフランス料理みたいな感じだった。

高いだけあって美味しかった。ミルシアも幸せそうに食べている。食べ終わると、大金が入った事だし、ミルシアの武器でも買うか、という事になって武器屋に向かった。

元々ミルシアは遠慮してナイフだけでいいと言っていたけど、魔法使いは、杖を持っているそうだ。

杖は中に埋め込まれた宝石の効果で、魔法の威力を上げたりできるみたいだ。

武器屋の中には、前来た時に居たドワーフのオッサンがいた。

「オッサン、また来たよ！」

「んっ？あなたは確か・・・双剣を買ったやつか」

「覚えていてくれたんだ」

「ああ、双剣なんて珍しい物を買ったんだ、忘れてないわ」

やっぱり珍しいのか・・・。

「んっ、今日は女連れか？」

「そう、今日は彼女の武器を買いに来たんだ」

「そうか、客なら大歓迎だ。で、武器はなんだ」

「私は魔法使いなので杖をお願いします」

「ほう、杖か。今ちょうど良いのが入ったばかりだ。ちょっと値が張るが大丈夫か？」

「ああ、いいぜ」

オッサンは奥に引っ込んだと思ったら、すぐに戻って来た。

手には、細い杖が握られている。

俺は杖と聞いて、仙人とかが持つてそうな長くてゴツいのを考えていたんだが、○リー・ポ○ターの杖みたいなの、細くて短い杖だった。

持ち手の先には、綺麗な緑の宝石が埋まっていた。エメラルドだろうか？

「これには、翠玉が使われていて、特に風、嵐の威力を強める効果がある」

やっぱりエメラルドだ。

「風に嵐ならちよつど良いじゃん。ミルシアどうだ？」

「ええ、大きさも小さくて扱い易いですし、良いです」

「よし！で、いくらだ？」

「一万セーブルだ」

「買ったー!!」

お金を払って店を出る。

ダンジョンに行くなら、野宿の準備も必要だと言っから、野宿の道具を買いに行く。

テントや食料など野宿に必要な物を買う。

野宿に必要な物を揃えると、結構な荷物になった。

「なあミルシア、こんなにいろいろ必要だったのか？」

「もちろんです。荷物はハヤト様が持ってくださいませよね？」

笑顔で言われる。

何だかミルシアの俺の扱いが酷くなってる。

まあ、持つけどね。あんな笑顔を向けられたら断れない。

ミルシアの武器や食事を合わせると今日は一万二千六百セル使った。

夕方まで町をぶらぶらして、宿に戻るとニーナがいた。

「ハヤトさん、ミルシアさん、昨日はありがとうございました」

「いえ、ニーナはもう大丈夫なの？」

「はい、もう大丈夫です。宿も余り被害を受けてなかったので安心しました」

「それは、よかった」

ニーナと別れて、夜ご飯を食べて、明日に備えて早めに寝た。

第14話 平和（後書き）

感想お待ちしております。

第15話 ダンジョンに行こう！（前書き）

何とか更新（^-^）；

まだ忙しいので次がいつになるか未定です、何とか早く更新できる様に頑張りますので、ご勘弁下さい。

第15話 ダンジョンに行こう！

朝ご飯を食べていると、ニーナを見かけたから声を掛ける。

「ハヤトさん、どうしたんですか？」

ニーナが近くに来て聞いてきた。

「俺達今日からダンジョンに行くから、何日か宿に戻って来ないと思っけど、よろしく！」

「もうダンジョンに行ける様になっただんですか！？」

「ああ、もうBランクになっただんだ！」

「それはおめでとございます！待っていますから、無事に帰って来て下さいね」

恥ずかしそうに微笑んで言って、行ってしまふ。可愛いな。

俺はミルシアとダンジョンの詳しい事を聞く為に、ギルドに向かう。

いつもの様にミリアさんの所に、と思って受付を見るとミリアさんはいなかった。

俺は若干寂しくなり、トボトボ受付に向かう。

「ハヤト様みっともないのでシャキツとして下さい」

ミルシアに後ろから罵倒される。うっ！俺の扱いが段々酷くなってる。

とりあえず、中年のおばさんのいる受付に行く。

「すみません、新しいダンジョンについて教えてもらえますか？」

「はい、ダンジョンですか？失礼ですが、ギルドランクを確認させて頂いても良いですか？」

俺はポケットに入れていたギルドカードを取り出して渡す。

「はい、Bランクですね大丈夫です。それで、新しいダンジョンについてですか？」

俺は頷く。

そういえばミルシアって、こういう時静かにしているよな。ミルシアには喋らないか、俺に暴言を吐くの両極端しかないのか？

「新しいダンジョンはここから一日ぐらいの所にあります」

意味の無い俺の考えを無視して話しは進んでいく。

「ダンジョンには洞窟や森などがありますが、新しく見つかったのは洞窟で、今の所ほとんど攻略されていません。魔物の多さからして相当強い主が居ると思われれます」

「洞窟ってどれくらいの大きさなんだ？」

「ハッキリとは分かりませんが、恐らく主の居る一番奥まで普通に歩いて、一日は掛かると思います」

「そうか、普通に歩いて一日か……。」

「えっ！一日!？」

「そう、一日です」

「一日って事は洞窟の中で野宿するの!?!危なくないのか？」

「あゝ、ダンジョンと言っても所構わず魔物が居る訳ではないので、魔物がほとんど居ない所もあるみたいです」

「そう言う事か。そういえばダンジョンに行つて何をしたら良いんだ？」

「ダンジョンの魔物は特殊で、倒すと魔石を残し消えます。その魔石を持って帰つて来て下さい。ギルドの方で買い取らせてもらいます。もちろん一番の目的は主を倒す事ですから、主を倒すと莫大な報酬が出ます」

「魔石を残して消えるって、まあゲームらしいな。」

「魔石?ダンジョンの魔物は他の魔物と違うのか？」

「いえ元は同じです。私達にも詳しくは分からないのですが、ダンジョンに居る魔物は倒すと、魔石を落として消えるみたいです」

「分かった。とにかく魔物を狩りながら主の所を目指せばいい良ん

だな？」

「その通りです」

「ありがと。ミルシア行こうか」

「はい、行きましょう」

町を出るとダンジョンのある方向に歩いて行く。

草原の中を歩いていると、ゴブリンの小さい群を見つけた。

俺が魔剣の威力を試そうとすると、ミルシアが先に魔法を発動させていた。ミルシアも杖の威力を試したのか！先を越された。

ミルシアからゴブリンに向かって、小さい竜巻みたいなのが突き進んで行く。ゴブリン達は巻き込まれ吹き飛んでいく。すぐに全滅した。

「……すげえ！」

「……」

ミルシアも驚いているのか目を見開いている。

「なあ、俺も魔剣を試したいから次魔物が現れたら俺にやらせて」

「……あ、はい分かりました」

「で、どうなんだ？俺はその魔法の元の威力を知らないから分からないんだけど」

「ええ、風の魔法だったのですが、嵐の魔法並の威力が出ていました」

「それは凄いな！嵐の魔法を使った時が怖いな」

草原を歩き続けていると今度はシャドウウルフが何匹か見つかった。

俺は左側に吊している赤い柄の剣を右手で抜き、右の青い剣を左手で抜く。二本の剣を構えてシャドウウルフに向かって走り出す。

一番近くにいる奴に右の剣で切り付ける。

ズバツ！！！！

普通に斬れた。……あれっ？魔剣じゃないの？何も起きなかったよ。もしかして、あの王女に騙された！？

訳が分からないから、左の剣でも斬ってみる。

ズバツ！！！！

さっきと変わらん！！何なんだ意味が分からないぞ！

「ハヤト様、多分魔力を込めないと発動しないのかもしれませんが」

俺が混乱していると、ミルシアが教えてくれた。

あつ、魔力か。魔力を込めると、了解了解………って、どうするんだよ!?

「魔力を込めるってどうしたら良いんだ?」

俺は残っている魔物を警戒しながらミルシアに聞く。

「え〜と、体の中にある力を集めて剣に注ぎ込む感じですよ」

え〜、体にある力を集めると、よく分からないけどやってみる。それを剣に注ぎ込むと。

すると右の剣は炎をが立ち上がり、左の剣は水を纏っている。

「おお!出来た!すげえ!!」

興奮してはしゃいでいると、シャドウウルフが迫って来る。

俺は右の炎を纏っている剣で切り付ける。シャドウウルフは斬られると、すぐに炎に包まれて燃える。

後に迫っているシャドウウルフを左の水を纏っている剣で切り付ける。ほとんど斬った感覚がなく斬れる。血もほとんど出ない。

シャドウウルフを全滅させても俺は返り血を浴びていなかった。

「こりゃ凄いな」

俺はその威力と、使い勝手の良さに感動していた。

その後も何度か魔物を倒し、ダンジョンに着いた時にはもう日が落ちていた。

「もう、暗くなっただし今日は外で野宿にするか」

「はい、ちょうどあちらに良い開けた場所がありました」

「じゃあそこに行こう！」

そこで野宿する事にした。

俺は今まで背負っていたでかいリュックを下ろす。中からテントを出して張る。

テントなんて張った事がなかったから手間取って、ミルシアに馬鹿にされながら張った。

木の枝を集めて来て焚火をする。

食事は持ってきた保存食を焚火で温めて食べた。意外と美味しくて驚いた。

見張りを交代でする事にする。ミルシアからする事になったから俺はテントに入って横になった。

第15話 ダンジョンに行こう！（後書き）

ご意見、ご感想お待ちしております。

今、忙しいので返事は遅くなってしまうです。

すみませんm(´・`m

第16話 ダンジョン探索(前書き)

更新出来ました。

いつの間にか、ユニーク数が10万を超えてました。
感謝です。

第16話 ダンジョン探索

「ハヤト様、起きて下さい」

ミルシアに起こされる。もう交代の時間が、早いな。全然寝た気がしない。

「ふあゝ、了解交代だな」

俺は欠伸をしながら起き上がり、ミルシアと見張りを交代する。

ミルシアはすぐに寝たみたいだ。寝息が聞こえてくる。見張りって言っても何もする事がない。ハッキリ言って暇だな。

そういえばこの世界に来てからもう一週間ぐらいか？いや、まだかな？よく覚えてないな。

こっちでは、毎日の内容が濃すぎて、もう一ヶ月は居る気がしてくるから不思議だな。

でも、地球の何のないダラダラした生活が懐かしいな。でもこっちに来てよかったのかな、俺にとったら。あのままあっちの世界でいたら碌な大人に成らなかつただろうし。今の生活は大変だけど、満足してるしな。

気が付くと、いつの間にか朝になっていた。

ヤバッ、寝てた！急いで周りを見るとミルシアが気持ち良さそうに寝ていた。

よかった。何もなかったみたいだな。それに寝ていたことも気付かれてなさそうだな。

俺はホッとしてミルシアを起こしに行く。

「ミルシア、朝だぞ〜。起きないとキスを「必要ありません！」。そうか……」

そんなに嫌だったのか。へこむな。

飯を食ってすぐに、ダンジョンに向かう。

ダンジョンの入口は特にどうって事はない普通の洞窟みたいな感じだった。

「なあミルシアここで良いんだよな？めっちゃくちゃ普通の洞窟だけだ」

不安になって聞く。

「ええ、ダンジョンも元は普通の洞窟なので仕方がないのでしょう。中は意外と広く、5人くらい並べる幅に天井も結構高い。

暗いのを予想していたけど、案外明るくて壁や天井が薄く光っている。

進んでいくと、すぐに別れ道が現れる。

やっぱり中は入り組んだりしているのかな？迷いそうだな。

「なあ、どっちに行く？」

「どっししましょう？私もどうすれば良いか分かりません」

「ん〜、あれだ。ずっと同じ壁を伝って行くとかは？」

「そうですね、悪くはありません。ただ、時間が掛かるでしょうが」

「まあ、それしかないからしょうがないだろ」

右の壁を伝って行く事にして、右に進んで行く。

すぐに、別れ道にたどり着く。

やはり右に進む。

別れ道に着く。

右に進む。

別れ道。

右。

別れ……。

「って、魔物はどうした！ダンジョンには沢山居るんじゃないのか！」

思わず叫んでしまった。

何でこんなに何も出ないんだ？ダンジョンじゃないのか、と心配になるだろう。

「静かにして下さい！多分、他の冒険者が先に倒しているんですよ」

ミルシアに睨まれた。ス、スミマセン。

「そうなのか？その割に他の冒険者に会わないけど」

「このダンジョンが結構広いでしょう。たまたま私達と同じルートを進んでる人でも居るでしょう」

「でも、今からルートを変えると迷うな。まあ楽し、このまま行くか」

「そうですね」

その後も右側に沿って歩き続けると、前から猿みたいな魔物が出て来る。

「ミルシア、やっと出たぞ！」

「来ます。気を付けて下さい」

「えっ！」

猿を見ると、杖の様な物を持っていた。

「キヤキヤキヤキヤー！」

猿が奇声を発すると、杖の先に火の玉が現れる。

「キー！」

杖が振られると人の頭ほどの火の玉が飛んで来る。

「クッ！」

油断していた。まさか魔法とは。

避けきれないと思った瞬間、突然目の前に水の玉が現れ、火の玉と衝突する。

水が蒸発するような音が聞こえ、辺りが水蒸気で覆われる。

「ハヤト様！大丈夫ですか？」

「ミルシア、ありがとう助かった」

俺は左の剣を抜き、水蒸気の中に突っ込む。

魔力を剣に込めると剣は火を纏う。魔物がいた所に切り込む。

確かな手応えがあり、魔物が火に覆われる。

火が消えると魔石が残った。魔石は綺麗な緑色だった。

魔石を回収してミルシアの所に行く。

「焦った、魔法を使える魔物がいたのか！」

「ええ、私も知りませんでした」

ミルシアも知らなかったのか。魔法を使えるのは珍しいのかな？

次は先手を打たれない様に注意しよう。

その後も、右沿いに進んで行く。魔物は何体か出て来たけど、みんな単体ですぐに倒せた。

「疲れてきたな」

「そうですね。もう結構な時間が経っていると思います」

ダンジョンの中にいると時間の経過が分からなくなるな。

「そろそろ、何処かで休もうぜ」

「ええ、休める場所を探しましょう」

探すって言っても、あまり魔物がないから何処でも変わらない気がするけど。

少し進むと開けた所に出た。

「よし、ここで休もう！」

俺とミルシアは座って、持ってきた食べ物を食べる。

俺は集めた魔石を取り出す。

魔石の色は様々で、緑や青、赤、黄色などを拾った。

どうやら、魔物によって色が変わるみたいだ。

「なあ、ミルシア。主って何処にいるんだろう？」

「私に聞かないで下さい。私も知りたいです」

「ん、そうだよな。じゃあ『ギヤヤヤヤ！』えっ何だ？」

突然洞窟の先から悲鳴が聞こえた。

第16話 ダンジョン探索(後書き)

感想などお待ちしております。

第17話 ネロミニ(前書き)

遅くなりました。

短いですが(ー・ー・)

第17話 ネコミミ

俺達は悲鳴がした方に急いで向かう。

それにしても、ダンジョンに入って初めて他人の存在を感じたのが悲鳴とは、さすがダンジョンというところだな。

少し行くと前から数人の人が必死の形相で走って来た。

「おい！いったい何があったんだ？」

俺は状況が知りたくて聞く。

「あつ！ド、ドラゴンだ、主のドラゴンが出たんだ！」

「俺達じゃとても敵わない！」

俺の声を聞いて初めて俺達に気付いたみたいで、安心しながら話してくれた。

「主か、ミルシア意外と早く見つかったみたいだぞ」

「ええ、そうですね。行きますか？」

「おう！さっそく行こうぜ」

「おい、あんたら2人で行くのか」

「やめときなよ、ドラゴンだよ」

俺達が主に挑みに行こうとしたら、さっきの人たちに呼び止められる。

「んっ、ミルシア、ドラゴンってどれくらい強いんだ？」

「オーガよりは強いですね」

「まじか、まあ大丈夫だろ」

俺達はドラゴンの待つ所に向かう。

「お、おい」

何か言っていたが無視する。

「きゃあああああああー」

ドラゴンの所に向かって走っていると、また悲鳴が聞こえてきた。

「何だ！あいつ等意外にもいたのか、急ぐぞ！」

スピードを上げて走るとすぐに開けた場所に出る。

中にはデカイ魔物がいた。あれがドラゴンか！

ド、ドラゴン？

どう見てもドラゴンと言っより恐竜なんだけど……。

もっと、こう羽の生えているのだと思っっていたけど。

少しドラゴン見るの楽しみにしてただけだな。

俺がひそかにショックを受けていると、ドラゴンの前にうずくまっ
ている人が目に入ってくる。

ドラゴンはその人を踏みつぶそうとしていた。

「くそっ！ミルシア、援護頼む！」

「分ってます」

俺はドラゴンの横っ腹にタックルをかます。

ドラゴンはバランスを崩してうずくまってる人を踏めずに距離をと
る。

俺はうずくまってる人の横にしゃがむ。

「おい！大丈夫か？」

その人は女の子で猫耳が付いていた。

「ス、スン？」

どう見てもスンだった。

「ハヤト様！」

ミルシアの声を聞くと、俺はとっさにスンを抱き上げその場から飛退く。

俺がいた場所にドラゴンのしっぽがものすごい速さで振られる。

とりあえずスンを端に寝かしてドラゴンに向かう。

俺は左右の剣を抜く。

すぐに魔力を込めると炎と水を纏う。

ドラゴンはミルシアの魔法に翻弄されている。

俺は突っ込んで行って、首にむけて両手の剣をそろえる。

「おらあ！」

気合いを入れて、力任せにたたき付ける。

炎と水が迸る。

「グギャー！」

ドラゴンの頭が落ちる。

「ふへっ？」

思っていたよりも簡単に倒せてしまった。

「さすがはハヤト様ですね」

ミルシアが呆れた様に見ていた。

俺はスンの所に向かう。

「スン！大丈夫か？」

「んっ、んっ！」

俺が呼び掛けるとスンがゆっくりと目を開ける。

俺を認めると、驚いた様に見開く。

「お、大丈夫か？」

「ふえっ！な、なんで、ハヤトさんが！？」

混乱しているスンはすごくかわかった。

「いや、たまたま一緒のダンジョンに来てたら、悲鳴が聞こえたから」

「そうなんですか！？あれ、そういえばドラゴンは？」

「ああ、俺達が倒しておいた。そこに倒れているだろ」

「ふえっ！？本当だ！」

スンは驚いて、目を見開いている。

「それはそうと、スンはどうしたんだ？まさか一人で来たのか？」

そういえば昨日、町で見た時は他の人と一緒にいたはずなんだが。

「え〜っと、……他にもいたんだけど、どこに行ったんだろう？ハハッ」

スンは悲しそうに言った。

「もしかして、さっきの逃げてきた奴らか？」

「そうかも。あたしはいつの間にか逸れてたから……」

スンは今にも泣きそうな表情だった。

もしかして、他の奴らに置いて行かれたのか？逃げるためのおとりにされたのか？

「そうか、これからどうするんだ？」

「えっと、何も無いけど……」

「じゃあ、俺達と一緒に行くっぜ！」

「えっ、良いんですか？」

スンが心配そうに言う。

「ええ、もちろんですよ」

ミルシアが頷いて、俺のほうを見てくる。俺は頷く。

「そうだ、大丈夫だ。行こうぜ！」

第17話 ネロミニミ(後書き)

感想お待ちしております。

第18話 町へ(前書き)

今年最後の更新。

短いですが、すみません。

第18話 町へ

俺達は、ドラゴンの魔石を回収して（魔石は真っ赤だった）、スンも連れて、出口に向かった。

一度通った道だったから来た時よりも早く外に出れた。

「もう、真っ暗です……」

スンが少し不安そうに言う。

「そうだな、ここで野宿しよう。ミルシア、野宿の準備をしよう。あつ、スンは休んでいていいぞ」

俺はスンを気遣かって言う。

「ぜ、全然疲れてませんし、手伝いますよ！」

スンが焦った様に言った。

「そ、そうか。じゃあスンも野宿の準備を手伝ってくれ」

俺はどうしたのかと、思ったけど、スンは普通に準備を手伝っているから、何なのかは分からなかった。

野宿の準備が出来ると、ご飯を食べる。スンは食べ物以外の人が持っていたらしく、持っていなかったから俺達のを分けた。

スンは申し訳なさそうにしてたけど、遠慮しなくていいのに。

「ご飯を食べ終わるともう寝る事になり、順番に見張りをする事になった。」

俺はスンは休んでいていいと言ったのに、また自分もやると言っていたから三人で順番になった。スン、大丈夫なのかな？

ミルシア、俺、スンの順番になった。

俺とスンはミルシアに見張りを任せて眠る。

俺が横になっていると、スンの寝息が聞こえて来た。

よかった。ちゃんと眠れてるみたいだ。

俺の意識も闇に落ちた。

「ハヤト様、時間ですよ」

「ふあゝ、……了解」

俺は隣で寝ているスンを起こさない様にして、ミルシアと交代する。見張りをしながらスンの顔を眺める。

スンは多分仲間に見捨てられた、と思っっているだろうな。実際そうなんだけど……、まあ、あいつらも自分の事でいっぱいだったのだろう。

スンがショックを受けてなかったら良いんだけどな。

そういえば、スンはこの前冒険者になったばかりだと言ってたな、俺みたいなチートじゃないと、もうBランクになってる訳がないのに……、何でダンジョンに居たんだろう？

ん、また聞いてみよう。

特に何も起きないまま時間になった。

俺は、スンを起こしに行く。

「お、い、スン時間だぞ」

スンの肩を揺さぶりながら声を掛けるけど、なかなか起きない。

スンの可愛くてあどけない寝顔を見ると、抱きしめたくなくなった。

いやっ、待て俺。早まるな。ここで抱きしめてしまったら何か大切な物を失うぞ。

駄目だ、可愛い過ぎる。

俺がスンを抱きしめようと身をスンの上に乗り出した時、スンが突然目をパチツと開いた。

「な、何？」

スンが状況が分からず混乱している。

「……………」

俺は突然の事に固まってしまった。

「……………?」

「あつ、こ、交代の時間だから起こそうとしていたんだ。スンがなかなか起きないから、困っていたんだよ」

俺は急いでスンの上から身体を除けながらまくし立てる。

「そ、そうなんですか?……すみません」

スンの疑わしげな視線が突き刺さる。

「い、いや大丈夫だ。起きてくれたから。じゃあ見張り頼む」

俺は逃げる様に横になった。

朝日に起こされて、朝飯を食べる。

「スンは町に戻ったらどうするんだ?」

「まだ、何も決めてないです」

「そっぴゃ、ギルドランクは何なんだ?」

「え〜と、まだDです」

「Dなんですか？何でダンジョンに？」

「え、え……」

「他のやつに連れて来られたんだろ？」

「え！あ、そうです」

「なあ、もし良かったら俺達とパーティーを組まないか？」

「良いんですか？」

「全然大丈夫だぞ、な、ミルシア」

「ええ、ハヤト様がいいなら」

「ほ、本当ですか？ありがとございます」

スンは嬉しそうに言う。

俺たちは街に向かう。

町に着くと、スンに聞く。

「スンは何か取って来た物はあるか？」

「はい、ダンジョンで倒した魔物の魔石はあたしが持っていたから、

それが」

「じゃあ、換金しに行こうぜ」

俺達は、ギルドに向かう。

ギルドに入るといつもの様にミリアさんの所に行く。

「すみません、魔石を持ってきました」

俺とスンは魔石を出す。

「こちらですね、少々調べておきますので明日また来てください」

「分かりました。また来ます」

俺達はギルドを出る。

「スンはここに住んでるのか？」

「いえ、宿に泊まっています」

「じゃあ、明日また朝ここで」

「分かりました」

「また、明日」

俺とミルシアはスンと分れて宿に向かった。

第18話 町へ(後書き)

感想お待ちしています。

みなさんよいお年を。

第19話 スン(前書き)

遅くなりましたが、新年明けましておめでとうございます。

今年もよろしく願います。

第19話 スン

「ふあゝ」

俺はギルドに向かいながら欠伸をしていた。

「……ハヤト様はいつも欠伸をしていますね」

ミルシアが呆れた様な視線を送ってくる。

「そ、そうかな？それは意識してなかったな……」

「ちゃんと頭が働いてるんですか？」

「ぐっ、だ、大丈夫だと思う……」

「そうなんですか？」

俺はミルシアから疑いの籠った目を向けられた。

まあ俺は基本あんまり考えずに直感で行動する人だから、ミルシアの言う事を完全に否定することはできない。

俺達はギルドに着くとスンを探す。

「あつ！いました。んっ、あれは？」

ミルシアの声にミルシアの見ている方を見ると、スンがいた。

スンは何人かの冒険者と揉めている様な感じだった。

近づいていくと話し声が聞こえてくる。

「だから、俺達が倒した魔物の魔石は何処にあるのか聞いてるんだ！」

「そ、それはギルドに換金を頼んでいるから、受け取ったら山分けにしたら……」

「ハハハ。こいつ何言ってるんだ。そんな約束本気にしていたのかよ」

「元々お前には分けねえつもりだったし」

「お前はただの荷物持ちと困だよ。お前みたいな無能誰が必要とすんだよ!？」

冒険者達の言葉に、スンは泣きそうになっていた。

俺はスンの事には口を出さないでいようと思っていたけど、余りの言いようにこれ以上見ている事は出来なくなって割り込む。

「よう、スン。待たせたか？」

スンは俺の声を聞いて、俯いていた顔を上げる。

「ハ、ハヤトさん!？」

「あ、っ、お前は何だ？」

「あつ！お、おいコイツは……」

一人が俺の事に気づいた様子で他のやつらに耳打ちしている。

「なんであんたらがコイツと？」

一人が聞いてくる。

「俺達はスンとパーティーを組んだんだ」

「あんたらここに居るって事はあのドラゴンを倒したんだらう？その実力ならコイツは邪魔にしかならないぞ」

「それにコイツは俺らを騙して魔石を独り占めする様な奴だぞ」

「おいおい、お前らが騙してスンにただ働きさせようとして、しまいいには見捨てて逃げ出したんだらう？」

俺が指摘すると冒険者達は悔しそうに唇を噛んでいる。

「それに俺はスンを必要としている」

俺はスンの頭に手を置きながら言う。

「くそつ、覚えてろよ！いつか金を取り返してやるからな！」

ドラゴンを倒した俺達には敵わないと思ったのか、捨て台詞を残して去って行く冒険者達。

「よかったなスン。あいつらの事は気にしなくていいからな。金も

貰っとけ」

「うん。ね、ねえ、あたしが必要ってどうしてなの？」

スンが恐る恐る聞いてきた。

「えっ！そ、それは……………」

思ってもいなかった事を聞かれ、俺は狼狽する。

「……………やっぱり必要じゃないですよね……………」

「必要と言ったのは嘘だったのですか、最低ですね」

二人の言葉に何か理由を言わないといけないと思いい口を開く。

「あ、あれだ、荷物持ちとか？」

「あの人達と同じですか……………」

「最低ですね。やっぱり理由はないんですか」

俺は全身から汗が吹き出てくるのを感じた。

くそっ、もうやけだ。

「そう、あれだ、スンはネコミミでかわいいだろう。そう、俺にはスンのかわいさが必要なんだ！」

勢いで言っけししまい顔が熱くなるのを感じた。

「ふえっ……」

「……身体目当てですか、本当に最低ですね」

スンは顔を真っ赤にして俯く。

ミルシアは軽蔑した目で睨んできた。

「もういいだろ！受付に行こうぜ」

俺は逃げる様に言って受付に向かう。

いつもの如くミリアさんの所に向かう。

「何か揉めていたみたいですけど、大丈夫でしたか？」

「ああ、一応は」

「あの人はしつこい事で有名ですから、気を付けて下さい」

あいつらしつこいのか、スンが狙われるかも知れないな。気を付けよう。

「ありがとう、昨日の魔石はどうだった？」

俺が聞くとミリアさんは奥に行つて、魔石を持って来た。

「まずハヤト様ですね。これは新しいダンジョンの主ですね」

そう言つて真つ赤な魔石を取り出した。

「主の討伐ありがとうございます。これであのダンジョンもじき無くなるでしょう」

「いえいえ、倒せたのはたまたまですから」

「この魔石は5万セーブルです。他に千セーブルの魔石が13個で、合計6万3千セーブルです」

俺がお金を受け取るとミリアさんはスンの魔石を取り出す。

「スン様は千セーブルの魔石が48個の4万8千セーブルです」

スンもお金を受け取りギルドを出る。

「なあスン、あいつらに襲われるかも知れないから、俺らと同じ所に泊まらないか？」

「えー！良いんですか？」

「ああ、良いよなミルシア」

「ええ、大丈夫ですよ」

「と言う事だ」

「すみません。お願いします」

俺達はスンの泊まっていた宿に行つて、スンの荷物を取つて、俺達

の宿に行った。

受付にいたニーナに話し掛ける。

「ニーナ。また一人増えるけど良いか？」

「はい、大丈夫ですよ。部屋は同じでいいですか？それにしても八ヤトさんはモテモテですね」

「そういうのじゃないよ。部屋は同じでいいよ。ありがとう」

俺達は部屋に向かう。

ベッドは二つしかないから毛布を買ってきて、俺が床で寝る事にした。

ミルシアもスンも自分が床でいいと言っていたけど、俺が床だと押し切った。

スンは緊張しているのか余り喋らなかったけど、ベッドに横になるとすぐに寝ていた。

俺もすぐに眠った。

第19話 スン（後書き）

感想お待ちします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1558y/>

ハーレム目指して何が悪い

2012年1月6日19時42分発行